舊典類纂

皇位繼承篇

巻九 巻十

五

和書門
類
號 九五七
函 四八
架 五
冊 六

内閣文庫
和書
類
九五七號
六冊
一架
一四四函

内閣文庫
番號 和 957
冊數 6 （5）
函號 144 24

皇位繼承篇卷九

議官 福羽美静 撿閲
少書記官 横山由清
大書記生 黒川眞頼 編纂

讓位異例

天皇崩ズト雖ヘドモ仍御存在ノ議ヲ以テ皇位ヲ讓シ事

○後一條天皇

日本紀略 後一條天皇云云長元九年四月六日上東門院○彰子ニテ天皇ノ御母ナリ入内依天皇不豫也云云十七日戊刻天皇落飾崩于清涼殿春秋廿九在位廿年去三月以来御體不豫子刻諸卿近衛以璽剣奉皇太子○皇太子ハ敦良親王ニテ即後朱雀天皇ナリ於昭陽舍依有遺詔暫秘喪事以如在之儀今日讓位於皇太弟

榮花物語（きるはわびしとなげく女房）うち〈〇後一條天皇ヲイフ〉の御なやみ日を經ておもらせ給て、四月十五日だにのうちは日ごとにまさらせ給ふ、女院中宮涙にくれておはしますと云云、つひに四月十七日の夕ぐれうせさせ給ひぬれば云云、位ながらの御ありさまは愛せさくいみじきのみぞあれど、おほやけの御ためにはなりまさらせ給ひてなり〇後一條天皇崩ズ、而シテ喪ヲ秘スルコト數日、仍御存在ノ儀ヲ以テ皇位ヲ讓ルト為ス、因テ此ノ條ト天皇疾病ニ因テ皇位ヲ讓シ事ノ條トニ掲ゲ以テ類ヲ分ツ

天皇時變ニ由テ皇位ヲ讓シ事

天下時變アレバ世態モ亦從テ變ズ、天皇為メニ皇位ヲ避ケコレヲ後主ニ傳ヘ以テ時勢ニ隨フ、後世コレヲ以テ法ト為ス可カラザルナリ

〇皇極天皇

皇極天皇紀　四年六月丁酉朔甲辰、中大兄〈〇天智天皇ヲイフ〉密謂倉山田麻呂臣曰、三韓進調之日、必將使卿讀唱其表、遂陳欲斬入鹿之謀、麻呂臣奉許焉、戊申、天皇御大極殿、古人大兄〈〇天智天皇ノ庶兄〉侍焉、中臣鎌子連知蘇我入鹿臣為人多疑、晝夜持劍、而教俳優方便令解、入鹿臣笑而解劍、入侍于座、倉山田麻呂臣進而讀唱三韓表文、於是中大兄戒衛門府、一時俱鏁十二通門、勿使往來、召聚衛門府於一所、將給祿、時中大兄即自執長槍、隱於殿側、中臣鎌子連等持弓矢而為助衛、使海犬養連勝麻呂授箱中兩劍於佐伯連子麻呂與葛城稚犬養連網田曰、努力急應須斬、子麻呂等以水送飯、恐而反吐、中臣鎌子連嘖而使勵、倉山田麻呂臣恐唱表文將盡、而子麻呂等不來、流汗沃身、亂聲動手、鞍作臣〈〇入鹿ヲイフ〉怪而問曰、何故掉戰、山田麻呂對曰、恐近天皇、不覺流汗、中大兄見子麻呂等畏入鹿威、便旋不進曰、咄嗟、即共子麻呂等出其不意、以劍傷割入鹿頭肩、入鹿驚起、子麻呂運手揮劍傷其

一脚入鹿、轉就御座、叩頭曰、當居嗣位天之子也、臣不知罪、乞垂審察、天皇大驚、詔中大兄曰、不知所作、有何事耶、中大兄伏地奏曰、鞍作盡滅天宗、將傾日位、豈以天孫代鞍作耶、天皇即起入於殿中、佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、斬入鹿臣、是日雨下、潦水溢庭、以席障子覆鞍作屍、古人大兄見走入私宮、謂於人曰、韓人〇中大兄皇子及中臣鎌子等ヲイフ殺鞍作臣、吾心痛矣、即入臥内、杜門不出、中大兄即入法興寺為城而備、凡諸皇子諸王諸卿大夫臣連伴造國造悉皆隨侍、使人賜鞍作臣屍於大臣蝦夷、於是漢直等、總聚眷屬、擐甲持兵、助大臣設軍陣、中大兄使將軍巨勢徳陀臣、以天地開闢君臣始有、説於賊黨、令知所起、於是高向臣國押、謂漢直等曰、吾等由君太郎〇入鹿ヲイフ應當被戮、大臣〇蝦夷ヲイフ亦於今日明日立俟其誅決矣、然則為誰空戰、盡被刑乎、言畢解劍投弓、捨此而去、賊徒亦隨散走、己酉、蘇我臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇記國記珍寶、船史惠尺即疾取所燒國記、而奉中大兄、是日蘇我蝦夷及鞍作屍、許葬於墓、復許哭泣云云　庚戌、讓位於輕皇子〇輕皇子ハ即孝徳天皇ナリ立中大兄為皇太子〇孝徳天皇皇位ヲ繼承スルコト、委シク八巻三皇子直ニ皇位ヲ繼承スルノ條ニ舉グ、見ルベシ

天皇事ヲ舉グルニ便ナラントシテ皇位ヲ讓シ事

海内皇命ニ抗スル者アレバ天皇師ヲ出シテ之ヲ討ツ、安ゾ天皇事ヲ舉グルニ便ナラントシテ皇位ヲ避クルノ理アランヤ、此ノ如キハ後世以テ法ト為スベカラザルナリ

〇順徳天皇

百練鈔　承久三年四月二日、被立三社奉幣使、宣命趣世人成不審歟〇後鳥羽天皇順徳天皇兵ヲ舉テ、北條義時ヲ討伐スルノ趣ノ宣命ナルベシ八日、内裏己下

御灌佛也、及晩洛中物忩也、重事已相定云云廿日今日有御譲位事、申刻大臣以下参入（天皇大炊殿　皇太子懐成即仲恭天皇ナリ）○懐成親王ハ御閑院被渡劔璽新摂政（ヲイフ）○道家已下諸卿相従之

神皇正統記下巻　承久三年春のころより上皇（○後鳥羽天皇ヲイフ）おぼしめしたつことありければ、俄に譲國し給ふ、順徳御身をこころやすくて合戦のことをもひとつ御心にせさせ給はん御はかりごとにや、新主（○懐成親王ニテ即仲恭天皇ナリ）に譲位ありまし云云

六代勝事記　同三年（○承久三年ナリ）四月廿日主上（○順徳天皇ヲイフ）位を太子（○太子ハ懐成親王ニテ即仲恭天皇ナリ）にゆづり給ひぬ、五月十五日に太上天皇（○後鳥羽天皇ヲイフ）天寶にむくはひとしく兵をめして、洛陽のや邊廷尉光季を討せられ、追討使をわかちつかはさる云云（○天皇御父後鳥羽天皇ト倶ニ兵ヲ擧テ北條義時ヲ討タント欲ス、故ニ皇位ヲ譲シコト知ルベシ）

天皇上皇ノ意ニ従テ皇位ヲ譲シ事

天皇皇位ヲ避クルノ意ナシ、而ルニ太上天皇諷諭シテ之ヲ避ケシム、天皇因テ上皇ノ意ニ従テ皇位ヲ新主ニ譲ルトイヘドモ、而レドモ意釋然タラズ、故ニ當時即チ兵ヲ擧グルニ至ルアリ、或ハ數世ヲ經テ後竟ニ兵革ニ及ブアリ、此條ヤ後世必ズ法ト為スベカラザルナリ

崇徳天皇　六條天皇　土御門天皇　後深草天皇

○崇徳天皇

愚管鈔巻四　おほくは御中わろしとこそ、崇徳院の位におはしましけるに、鳥羽院（○崇徳天皇ノ御父ナリ）は長実中納言が娘を寵して最愛に思召て、始めは三位せさせておはしましけるおん腹に、今の近衛院を生れさせ給へるを、東宮にたてて、崇徳院の后には法性寺殿の娘参られたる皇嘉門院ぞかし、その御子に

よしにて云云と定めて譲位は無しと申されければ、崇徳院はさるべしとて永治元年十二月に御譲位有りけり、保延五年八月に東宮に立せ給ひにしを、此宣令に皇太子とも有んずらんと思召けるを、皇太弟とかゝせられけれ時とまくいかにと又崇徳院の御意趣にこもりけり

續世繼物語卷三 男山

保延五年にや侍りけん、つちのとのひつじ年五月十八日よになくけうらなる玉のをとこゝや〇體仁親王ニテ即近衞天皇ナリ生れさせ給ひぬれば云云日にそへてめづらかなるちご給御このうちなるにつけても、いつのまにやこの御子の事にも位にもとおぼせども、后だちにこそうちはまさおはしますをさし越べきならねばおぼしめし煩ふほどに當代崇徳院の御子になし奉り給ふとていできさきみな月の廿六日皇子内へいらせ給ふ云云同七年〇保延七年ニテ即永治元年ナリ十二月七日御年三にて位ゆづり申させ給ふ〇崇徳天皇萬機ニ堪ヘズシテ皇位ヲ讓シニ非ズ、次下ニ保元物語及増鏡ヲ引テ、以テ其ノ情実ヲ示ス

保元物語上卷 保延五年五月十八日美福門院御腹ニ皇子御誕生アリシカバ、上皇〇鳥羽天皇ヲイフ殊ニ悦思召テ何シカ春宮ニ立給フ〇春宮ニ立シハ近衛天皇ナリ永治元年十二月七日三歳ニテ御即位アリ依テ先帝〇崇徳天皇ヲイフヲバ新院トゾ申ケル、先帝コトナル御恙モ渡ラセ給ハヌニ押オロシ給ヒケルコソ浅マシケレ、依テ一院〇鳥羽天皇ヲイフ新院〇崇徳天皇ヲイフ父子ノ御中快カラズトゾ聞エシ、誠ニ御心ナラズ御位ヲサラセ給ヘリ〇崇徳天皇位ヲ讓シ事情コノ文ニテ見ルベシ

増鏡卷一 おどろのしも 永治に鳥羽の法皇は崇徳院の御心もゆかぬにおろし奉りて、近衛院をたて奉り給ひし時を、御つ〇崇徳天皇ヲイフいとしうむつからせ給ひて、その末になりて

までに勅使をくだして参らせ給ひて、内侍所劔璽など
をも渡しうつさせ給へりしぞかし、さてその御いきどほり給
ひてこそ、保元のみだれもおきいで給へりしを云云

○六條天皇

續世繼物語巻三 花ぞのゝにほひ 永萬元年六月廿五日位につかせ給ふ ○六條天皇ノ即位ヲイフ
まだふたつにぞならせ給ふを三年にやおはし
まそらむ、一院 ○後白河天皇ニテ六條天皇ノ御祖父ナリ おぼしめしおきつることと
みて、とうぐう ○東宮ナルベシ に位を譲りまゐり給て ○高倉天皇ニ皇位ヲ譲シヲイフ
をさなくおはしましに太上天皇と申もいとやんごとなし、
御年二なりて位につかせ給ふとせ是やはじめておはし
ましらむ

玉海 仁安三年二月十六日亥刻許、或人告送云、来十九日可レ有二譲位事一、於二閑院一可レ有二其事一云云、十七日未刻許参二東宮一 ○東宮ハ憲仁

親王ニテ即高倉天皇ナリ 相合女房談二譲位事一、昨日俄出来事云云、上皇 ○後白河天皇ヲイフ 有二思召事一 ○御出家事歟 且因レ之令レ急給、十九日今日御譲位事云云、子剣劔璽渡御 ○後白河上皇ノ出家ノ前ニ高倉天皇ヲ即位セシメント欲シテ、六條天皇ニ譲位ヲ急ガシメタルニテ、六條天皇ノ意ヨリ出シ譲位ニ非ズ、譲位ノ歳天皇御年五歳ナリ、因テ以テ異例ト為ス

○土御門天皇

増鏡巻一 おどろのした 承元二年にもなりぬ、十二月廿五日二の宮 ○後鳥羽天皇ノ二宮守成親王ニテ即順徳天皇ナリ 御冠し給ふ、修明門院の御腹なり、この
限なくこのもしき物に思ひ聞えさせ給
へる院 ○後鳥羽天皇ヲイフ なれば、二なくきよらを尽しいつくしうかしづきをり
給ふ事なのめならず、つひに同じ四年十一月に御位につけ
奉り給ふとぞ、帝 ○土御門天皇ヲイフ 今年こそ十六にならせ給へ
ばいまだ若うおはしますに、かゝるをいとほのぞあはれ
とおぼされけり、永治のむかしの鳥羽の法皇崇徳院の御心も

世のねにおろし給ひて、近衛院をまゐらせてまつり給ひしと
きく、帝いみじう志ぶらせ給ひて、その末になるまで勅使を
ひまなく参らせ給ひて内侍所鏡璽などをも渡し
この日させ給へりしぞかし、さてその御いきどほりのまゝにて
にや保元のみだれもおきいで給へりしを、此帝○土御門天皇ヲイフ
さいとあてにおはしましけるこのなる御本上にて、おぼしむそぞ
まねにはあらねども、けしきにもあらはし給はず、いとあへなき
事に思ひわけし、承明門院などいまそいとむつかしくおぼされ
けれ○土御門天皇ノ災異ヲ以テ皇位ヲ皇太弟守成親王ニ譲ル、此ノ文ヲ按ズルニ天皇災異ヲ以テスル者ハ、恐クハ辞ト為スノミナラン

六代勝事記　阿波院天皇○土御門天皇ヲイフハ隠岐院○後鳥羽天皇ヲイフ
第一の子云云在位十二年のあひだ、天地変災なく雨降
時をあやまたず國をさまり民ゆたかなりし、太上天皇○後鳥羽天皇ヲイフ
威徳自在に楽にほこりて万方に撫育を忘れ給ひ、又近臣
寵女の訴つよくして四海の清濁をわかざるゆゑに、今上陛下の○土御門天皇ヲイフ
帝運いまだきはまり給はざるをおろしまつり、
茅洞の風秋はげしく、汾山の月影さびしかりき○土御門天皇災異累ニ臻ルヲ以テ辞トシ、皇位ヲ順徳天皇ニ譲ルトイヘドモ而レドモ其意已ムコトヲ得ズシテ後鳥羽上皇ノ意ヲ奉ズルニ在リ、六代勝事記ノ文見ルベシ、

承久軍物語上巻　承元四年十二月一日上皇○後鳥羽天皇ヲイフ第三
の皇子守成にこと○順徳天皇ヲイフを御位につけ給ひて、第一の御子○土御門天皇ヲイフ
をおしおろし奉らしめ給ふ、これは當腹
御寵愛によつてなり、されば一院○後鳥羽天皇ヲイフ新院○土御門天皇ヲイフ
御中よからずとぞきこえし

○後深草天皇

増鏡巻四おりゐるくも　その年○正元元年ヲイフ八月廿八日東宮○恒仁親王ニ

テ即亀山天皇ナリ十一にて御元服し給ふ、御いみな恒仁ときこゆ、世の中やうやうほのめくさゆる事あれば、御つ○後深草天皇ヲイフゝあてのごとおぼされて、よゐはまめしづかなる御物語はつゝじふ、内侍所の御拝は数をかぞへられければ、五千七千四日なりけるをうけたまはりて、辨の内侍

千代といへば五つのみそぢ七千にあまる日かずを神はかぞふれど、かくて十一月廿六日出立させ給ひけり、宮はなしきさへおそれに為うちそへて物がなしくおぼえければ、伊勢はどがあひも思ひぬあやしきを、といひけん言葉をさへ今はとおもひてたのもそく、おりゐ、うへ○後深草天皇ヲイフもおぼしまうけ給へれど剣璽のいでさせ給ふなど常は御身をはなれざりつるならひ、十三年は御なごりいとゞわかれにも忍びがたき御なごりきをこの事しげ、名も宝て、弁内侍

いまはとてありける雲はおくるれどむかしのうちぞかきくらしける○後深草天皇ノ皇位ヲ亀山天皇ニ讓シハ、御父後嵯峨天皇ノ意ニ從ヒシコト、增鏡ヲ見テ知ルベシ、因テ此ノ條ニ載ス

讓位非例

天皇權臣ノ奏スルニ從テ皇位ヲ讓シ事

後宇多天皇以来數世權臣跋扈ス、天皇皇位ヲ新主ニ傳フルニ必ズ其ノ意ニ從ハザルヲ得ズ、是ニ由テコレヲ觀レバ、天皇ヲシテ徒ニ神器ヲ擁セシムルナリ、後世必ズコレヲ以テ法ト為スベカラザルナリ

○後宇多天皇

後宇多天皇　後伏見天皇　花園天皇

正應天皇御記　弘安十年十月廿一日今日讓位也○後宇多天皇ノ皇

位ヲ伏見天皇ニ譲ルヲイフ去十二日自關東依申也○關東ハ北條貞時ヲイフ

増鏡巻六老のなみ何となく過ゆけど、弘安も十年になりぬ、この帝○後宇多天皇ヲイフ位につき給ひて十三年ばかりになりぬらん、本院○後深草天皇ヲイフ待遠におぼさるらんといとほしくおもしちりきかにや、例は東より奏する事なれど遲し○東ヨリ奏スルトハ北條貞時ノ奏スルヲイフ新院○亀山天皇ヲイフは御心のうちには、心細う思しめしなやむべし云云よろづあくのぞおぼさるゝほどなれど、その年の十月に○弘安十年十月ナリおりゐさせ給ふ○後宇多天皇ノ北條貞時ノ奏ニ従テ皇位ヲ伏見天皇ニ譲ルヲイフもとのうへ○後宇多天皇ヲイフは廿一にぞならせ給ひける、御本上もいとうるはしく乃堅そゝるさへ満におぼして、まだよのに御才もかしこうめでたうおはしませば、御まつりごとなども中々譲やうえやしなどおぼされつるに○亀山天皇ノ院中ニ於テ政務ヲ判決セルヲ、今ニ至テハ御子ノ當今後宇多天皇ニ譲ラント思シ召シタルヲイフナリいとあへなくうつろひぬる世を、そげなく新院はおぼさるべし、春宮○煕仁親王ニテ即伏見天皇ナリ位に即給ひぬれば、天下本院○後深草天皇ヲイフにおしうつりぬ、世の中おしかはれて人は心ざしもかはるきはにぞなびかれける

北條九代記巻十一弘安十年十月廿一日京都ニハ主上○後宇多天皇ヲイフ御譲位ノ御事アリ、主上今年僅ニ廿一歳ニナラセ給フ、龜山ノ新院モ只今ノ御譲位ハ餘ニ早速ノ御事ナレバ、イマダ遲カラズ御残リ多クオボシメシ、主上モ本意ナラズト聞エサセタマヘドモ、後深草ノ本院○伏見天皇ノ御父ナリ強ニ待兼サセタマフベシ、只疾御位ヲユヅラセタマハンハ然ルベキ太平比和ノ御基タルベキ旨、關東ヨリ奏シ申セバ、御心ノマヽナラズ、俄ニ御譲位有テ東宮煕仁御位ニツカセタマフ

◯後伏見天皇

増鏡巻七〔第十三〕文の年はむ月の頃〔〇正安二年正月ナリ〕内侍所御注連の
おはしますをいかなるべきことゝもやうやう忍びてさゝめく程
とかくあれ、東より御使〔〇北條貞時ノ使者ナリ〕のぼるとて世中さわ
ぎて、禅林寺殿見奉り給ふ世にとや〔〇禅林寺殿トハ亀山天皇ハ皇統ヲイヘルニテ、コヽニテハ後二條天皇ヲサシテイヘリ〕正月廿一日春宮〔〇邦治親王ニテ後二條天皇ナリ〕即位に
つかせ給ひぬ、おりゐ給ふ帝〔〇後伏見天皇ヲイフ〕十四にて太上天皇に
尊号あり

北條九代記巻十一 正安三年正月鎌倉ヨリ使節トシテ隠
岐前司時清山城前司行貞上洛シテ、主上ノ御位ヲ下シ奉リ
〔〇主上ハ後伏見天皇ヲイフ〕東宮〔〇東宮ハ邦治親王ニテ即後二條天皇ナリ〕ヘユヅリ奉リ給フ、
主上今年イマダ十四歳御在位ワヅカニ三年ニシテ、何ノ御
事モオハシマサヾリケルヲ押オロシ奉ルコト、天道神明ノ
照覧モイカヾ恐ロシトゾ心アル人ハ申合レケル、太上天皇
ノ尊號蒙ラセタマヒケリ、王道久シク廢レテ政事ニ付テ
ハ萬叡慮ニ任セラレズ、天下ハコレ天子ノ天下ニモアラズ、
又天下ノ天下ニモアラズ、關東ヨリ計ラヒ奉リ、武家ノ天下
トナリケルコトヨト申ス人モ多カリケリ、邦治親王御位ニ
ツキタマフ、御寶算十七歳、二條太政大臣兼基公關白タリ、龜
山法皇後宇多上皇スデニ院中ニシテ御政務ヲ聞シメス

〇花園天皇

増鏡巻八〔秋のみ山〕文保二年二月廿六日御門〔〇花園天皇ヲイフ〕おりゐ
させ給ふ、春宮〔〇尊治親王ニテ即後醍醐天皇ナリ〕位につかせ給ふ、ことし三十にみたせ給
へば、待どほなりつるにめでたくおぼさるべし〔〇花園天皇皇位ヲ後醍醐天
皇ニ譲シコトハ、伏見天皇御在位ノ時、北條貞時ガ計ラヒヲ
以テ、強テ定メタル例ニ因ルニテ、花園天皇ノ意ヨリ出タル
ニ非ズ、次下ニ北條九代記ヲ引テ粗其ノ事情ヲ示ス、尚委シ
クハ巻六定策非例ノ條下ナル権臣両皇統迭立ノ議ヲ建テ
定メテ治世ノ期限ヲ十年
トセシ事ノ條ヲ見ルベシ〕

北條九代記巻十二 文保二年二月二十六日京都ニハ御譲位ノ御事アリ、主上○花園天皇ヲイフ今年二十二歳、春宮○尊治親王ニテ即後醍醐天皇ヲイフハスデニ三十歳ニアマリ給フ、コレハ後宇多院第二ノ皇子尊治親王ト申奉ル、御母ハ談天門院、參議忠繼卿ノ御女ナリ、皇子スデニ春宮ニ立テ御年三十一歳ニナラセ給ヘバ、後宇多法皇ヲ初メタテマツリ、ソノ方ザマノ人々ハ待兼サセラルベシトテ、關東ヨリ計ラヒ申テ、同廿九日尊治親王御位ニ即給フ

遜位

天皇事故アリ、已ムコトヲ得ズシテ皇位ヲ避ク、今是ヲ記シテ遜位ト為シ、以テ譲位ト別ニス、文字上ニ於テ論ズレバ、譲位ト遜位ト別ナシ、百練鈔ニ鳥羽天皇云云保安四年正月廿八日遜位ト記セリ、鳥羽天皇ノ遜位ハ即譲位ナリ、以テ知ルベシ云○神皇正統記巻五高倉院云ゑるうふ遜位の事ありしも、世をいとはせはしけるにやとぞ、ト而シテアリ、コレモ亦譲位ヲ遜位トイヘリ今特ニ譲位ト記セズシテ、遜位ト記スル者ハ、唯天皇事故アリ、已ムコトヲ得ズシテ皇位ヲ避クルヲ認ノシメント欲スルノミ、抑、天皇事故アリ已ムコトヲ得ズシテ皇位ヲ避クト雖ヘドモ、而レドモ其ノ神器ヲ以テ新主ニ傳フルガ如キハ遜位ノ例ニ非ズ、今遜位ト稱スル者ハ、天皇事故アリテ皇位ヲ避ク、其ノ神器ニ於テハ受クル者無シ、是ヲ遜位トイフ

陽成天皇 花山天皇 仲恭天皇

㊀陽成天皇

陽成天皇紀　元慶八年二月四日先是天皇手書送呈太政大臣ヲイフ○基經曰朕近身病數發動多疲頓社稷事重神器叵守所願速遜此位焉宸筆再呈肯在難行是日天皇出自綾綺殿遷幸二條院二品兵部卿本康親王右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多云云扈從文武百官供奉如常但少納言不奏給鈴之狀諸衛不稱警蹕○常ノ行幸ト異ナルヲイフ神璽寶劍鏡等依例相從驛鈴符内印管鑰等留置承明門内東廊令參議正四位下行左大辨兼播磨守藤原朝臣山陰從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸房左少辨正五位下安倍朝臣清行等留守焉會文武百官於院南門○院南門ハ二條院ノ南門ナリ詔曰現神止大八洲御宇日本根子天皇加御命良萬宣御命乎親王等王等臣等百官人天下公民衆聞給止宣食國乃政乎永遠聞食倍喜御病時々發已止有天萬機滯已久成奴天神地祇之祭乎毛闕怠已止有奈牟加止危美畏利念保之天皇位乎讓遜給天別宮尓遷御坐奴止宣御命乎親王等大臣等聞給部○陽成天皇二條院ニ遷御アリテ皇位ヲ讓ルノ詔アリ、而シテ受禪ノ君未タ定ラズ、サテコレ迄ハ天皇ノ意ヲ宣セシナリ、天皇ノ意実ニ此ノ如クナリシニヤ頗不審ナリ、因テ次下ニ諸書ヲ引テ其ノ情実ヲ示ス承詔天○陽成天皇ノ詔ヲ臣下ノ承ルニテ上ノ文ヲ受ケタルナリ恐美畏毋國典尓准天太上天皇之尊號乎進留○群臣奏シテ陽成天皇ニ太上天皇ノ尊號ヲ上リシナリ、然ルニ大鏡裏書ニ元慶八年三月上ニ尊号トアルハ誤ナリ、陽成天皇ノ尊号ハ光孝天皇即位ノ後上リシニ非ズ又皇位波一日毋不可曠一品行式部卿親王波○時康親王ニテ即光孝天皇ナリ諸親王中尓貫首毛御坐又前代尓無太子時尓波如此老德乎立奉之例在加以御齡毋長給比御心毋正直久慈厚久慎深御坐天四朝尓佐仕給天政道乎毋熟給利百官人天下公民尓未天謳歌所皈咸無異望故是以天皇璽綬乎奉天天日嗣位定奉乎良久親王等王等百官人天下公民衆聞給部止宣○承詔ヨリ以下コレ迄ハ、群臣相議シテ時康親王ヲ迎ヘテ天皇トスルヨシノ宣命ナリ中納言在原朝臣行平於庭誥之百辟群寮並立侍焉事畢

王公已下拜舞而退、於是以神璽寶劍鏡等付於王公、即日親王公卿歩行奉天子神璽寶劔鏡等今皇帝 ○光孝天皇ヲイフ 於東二條宮、百官諸仗圍繞相從、二條院與二條宮相去東行數百歩、是夜皇太后 ○陽成天皇ノ御母藤原高子ナリ 出自常寧殿遷御二條院焉

大鏡卷二 太政大臣基経のおとゞは長良中納言の三郎におはします 云云 陽成院おりさせ給ふべき定にさふらはせ給ふに、融のおとゞやんごとなくて、位につかん思ふ心深くて、近き王胤をえらみば融らも侍ふるといひいでし給へるを、この太臣 ○基経ヲイフ 王胤なれど姓を給はりて、たゞ人にてつかへて、位につきたる事はありやと申出給へれば、さもある事なれど、この大臣さだめによりて 小松の帝 ○小松帝ハ即光孝天皇ナリ 是位につき給へるなり

○光孝天皇ハ陽成天皇ノ讓ヲ受ケシニアラズシテ、基経等ノ勧進ニ従テ皇位ニ即キタルヲイヘリ、此ノ條宜シク皇子群臣ノ勧進ニ従テ皇位ヲ継承トシ事ノ條ト合観スベシ

愚管鈔卷三 陽成院九にて位につきて、八年之の間、昔の武烈天皇の如く不斜淺ましくおはしましければ、をぢにて昭宣公基経ハ、攝政にて諸卿群議ありて、是をいかで國主とて國をも治めおはしますべきとてなんおろし参らせんとて、やうやうに定ありけるに、仁明の御子にて時康親王 ○光孝天皇ヲイフ とて、式部卿の宮にておはしましけるを、近くよせて、位にはつけまゐらせられける、是を光孝天皇と申

宇治大納言物語下巻 関白殿 ○基経ヲイフ をはじめて世のかうせなんと歎あひ給へど、このみかど、いさゝかのものどもをとりあつめて、くちなはに蛙をいくらともなく呑ませ、猫に鼠をとらせ、犬猿などをたゝかはしつゝ、殺させ給ふ事どもあり、はては人を木にのぼせさせ給ひて、うちころさせ給ひつゝ、いくらともなく人死ぬるに、関白殿昭宣公なげきて、

そらすぢなし、位をおろし参らせむとおぼして、さて皇
ぬる事を宮にも又近き御門の御ぞうなり、源氏に成給へる
などを見給ひき給ふに、大臣は心えてよく見えむといふ思ひ
きこゆめき仰せ給へ共、つきづきしくいみじきを、られかゝろし
見てもよくも見えぞと、おぼしくに、小松帝○時康親王ノ宮ニテ即光孝天皇ナリ
へ参りて此由申させ給へば、さ御よませ給ぬとて、しばしありて
入参りて、とみに出させ給はねば、けざやかに物し給ふとおぼすを
程にぞ出給へる、ふるめき神さびて御直衣も萎えばみたる、
をかしげなる様にて、何事に立よらせ給ひつるぞと申して、
そのかし給ひつる様もよく思ひしまして、位につかせ給ひなんや、
かしこくおはしましなんと見奉り給ひて、かしこしと申給へば、
いつぞのりと聞えさせ給へば、程へだてしさぶらひぬ御気色なれば、あさ
て日もよく侍ふ、吉日とて清くの御ぞ給ひぬ、さて内に参り給へ

れば○基経ノ内裏へ帰リ参リタルナリ木に人をのぼせて、うちころしたるを
興じて、人々笑ひ我もわらひ入ておはしませ、いとあさまし、
おもふ○基経ヲイフ基経申給ふ、つまづくに侍へば、くらべ馬も叶まじく
し侍ふに、行幸して御覧ぞべさせよし申給ふに、いとこしら
よろこばせ給ひて、いつぞのりと仰らるれば、あさてと申給へば、
よろこびていつしかと待わび給ふ、吉日に成ぬれば、かんだちめ
殿上人多く参りて、よき人々をえらびえりとゞめて、年老いたる
まじき人々つかうまつりて、御遊びといふ所に御輿よせて、おろ
し奉りて、さてほどにぞ物狂おしく人をさへ殺させ給ひて、世給
うせ侍ひぬべければ、おろし参らせつるとぞ申かけらるを吟せ
給ひてぞ、悪しきとかくこの家とて、おろしを承り給ひさ
りける

○花山天皇

日本紀略花山院云云寛和二年六月廿三日庚申、今暁丑剋天皇密々出禁中、向東山花山寺落飾、于時蔵人左少辨藤原道兼奉従之、先于天皇密奉剱璽於東宮○東宮ハ懐仁親王ニテ即一條天皇ナリ出宮内云云年十九

榮花物語山えな中納言なども法者出ちかつうはへり給ほどに、寛和二年六月廿二日の夜○廿二日トアルハ誤ナリ廿三日ノ夜トアルベシ俄かにうせさせ給ひぬとのゝしる、うちのそこらの殿上人かんだちべ、あやしがりて衛士仕丁にいたるまで、残る處なくもとめたてまつるに、ゆめにおはしまさねば、おほきおとゞよりはじめ諸卿殿上人みなまゐり集りて、壺々をさへみたてまつるに、いづこにもおはしまさん、あさましういみじうて、一天下あがりて夜のうちにおさまらぬ、さわぎたりけり

大鏡巻一○大慈光院本寛和二年丙戌六月廿二日の夜あさましく侍りし事は、人にも知られさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしこそ、御年十九、治天下二年、その後廿二年ぞおはしましき、あはれなることは、おりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出させ給ひけるに、有明の月のいみじう明かりければ、顕證にこそありけれ、いかゞすべからんと仰せられけるを、さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず、神璽寶劔渡りぬるにはと、粟田殿のさわがし申給ひけるは、まだ帝出させおはしまさざりけるさきに、手づから取りて春宮○東宮ハ懐仁親王ニテ即一條天皇ナリの御方に渡し奉りてければ、還り入らせ給はん事はあるまじくおぼして、しか申させ給ひける事ぞ、さやけき影をまばゆくおぼしめしける程に、月の顔にむら雲のかゝりて少しくらがりければ、わが出家は成就するなりけりと仰せられて、あゆみ

出させ給ふ程に云云 花山寺におはしましつきて、御ぐしお
ろさせ給ひてのち、粟田殿はまかりいでて、おとゞにもかはらぬ
姿、今一度見え、かくと案内申して、必ず参り侍らんと申し給ひ
ければ、我をばはかるなりけりとてこそ泣かせ給ひけれ、あはれ
にかなしきことなり〔○文ニ天皇手ヅカラ神器ヲ取テ東宮ニ渡ストアルハ、人ヲシテ渡サシメタルナリ、其ノ人トイフハ恐ラクハ藤原道綱ナラン、其ノ故ハ古鈔本、所謂逍遥院殿本ノ栄花物語花山ノ巻ノ書入ニ、寛和二年六月廿二日天皇密以左近少将藤原道綱被奉璽劒東宮御所凝花舎、低於東山花山御出家、召権僧正尋禅出家入道御名入覚トアリ、〕

○仲恭天皇

百練鈔巻十二 承久三年七月八日云云今日一院〔○後鳥羽天皇ヲイフ〕并修明門院於鳥羽殿御出家云云主上〔○仲恭天皇ヲイフ〕密々渡御九條殿云云〔○仲恭天皇ノ遜位ヲイヘリ、是ノ時ニ當テ天皇神器ヲ新主ニ傳ヘテ、而シテ後位ヲ避ケタルニ非ズ〕

皇年代略記下巻 承久三年辛巳四月廿日甲戌受禅〔四〕七月九日辛卯廢之〔四〕神璽鏡劒并置閑院密令退九條第給、未即位〔○仲恭天皇神器ヲ并テ九條第ニ退クトアルテ、遜位ノ情実ヲ知ルベシ、未即位トハ天皇未タ即位ノ礼ヲ行ハザルヲイフ〕

東鑑巻廿五 承久三年七月九日云云先帝〔○仲恭天皇ヲイフ〕於高陽院皇居遜位、密々行幸九條院、戌尅新帝〔○後堀河天皇ヲイフ〕自持明院殿被還御閑院御車其間自持明院近于禁裏軍兵警衛路次云云

神皇正統記下巻 廢帝諱ハ懐成、順徳の太子、御母ハ東一條院藤原の立子、故摂政太政大臣良経の女なり、承久三年春の頃より、上皇思しめし立事ありければ、俄に讓國し給ふ、順徳御身をかろめて合戦のことをも、御心のまゝにせさせ給はんとにや、新主〔○懐成親王ニテ即仲恭天皇ナリ〕に讓位ありしかど、即位登壇までもなくて軍やぶれしかば、外舅摂政道家の大臣の九條の第へのがれさせ給ふ、三種

神器なけれバ閑院の内裏にましまさずとかき、譲位ありのち七十七ヶ日ありて、あまたゝび神器を迎へ給ひけれども、日嗣にそなへ奉らで、後[illegible]院にゆづり給へりとて○仲恭天皇自ラ皇位ヲ遜レタルヲイフ、然ルヲ増鏡巻一新島守ニ云ク、七月九日、御門をおろしたてまつりき、この月とよ、譲位とてめでたうりし義のやうなり、七十余日にておりさせ給へる、さためしも、これやむかしめあるらん、もろこしにぞ十九日と、うや位におはそるれいありぬると、あらのふみよみし人のいひしと、ちそる、うやうのらざれやありけむ、トアルハ自他タガヘル記シザマナリ、仲恭天皇此ノ一乱ニヨリテ、自ラ御位ヲ遜レタルナレバ、打見ル所ハ北條氏ノ強テ皇位ヲ降シヽ如クナレバ、此ノ如クモ記セル者カ

北條九代記巻六 懐成親王○仲恭天皇ヲイフハ新院○順徳天皇ヲイフノ御ユヅリヲウケサセ給ヒケレ共、御即位ノ式モ調ノハズ、程ナク此乱○承久三年ノ乱ヲイフアリシカバ、三院トモニ遠島ニウツサレサセ給ヘバ、關東ヨリ計ヒ申テ僅カニ九十餘日ニシテ御位ヲオロシ奉リ、九條ノ廢帝ト申テ、王代ノ數ノ外ニゾオハシ

マス○仲恭天皇自ラ皇位ヲ避ク、後堀河天皇皇位ニ即ク、而シテ後仲恭天皇ヲ以テ降シテ親王ト為スヲ聞カズ、然ラバ則唯タ先帝ト稱セシ歟、承久軍物語ニせんていト見エ、皇代暦ニハ九條先帝ト見エ、皇胤紹運録ニハ九條廢帝ト見エ、皇代記ニハ廢帝ト見エ、而シテ又天皇ヲ以テ太上天皇トセシヲ聞カズ

廢位

廢位トハ天皇事故アリ、前天皇因テ皇位ヲ廢スルヲイフ、陽成天皇仲恭天皇ノ如キハ、自ラ皇位ヲ避ケシナリ、故ニコレヲ以テ廢位トハイフ可カラザルナリ

○淳仁天皇

淳仁天皇紀 天平寶字八年十月壬申、高野天皇○孝謙天皇ヲイフ遣兵部卿和氣王、左兵衛督山村王、外衛大將百濟王敬福等、率兵數百、圍中宮院、時帝遽而未及衣履、使者促之、數輩侍衛奔散、無人可從、僅與母家三兩人、步到圖書寮西北之地、山村王宣詔曰

掛末久毛畏朕我天先帝乃御命○聖武天皇以天朕仁勅之久天下方朕子伊末之仁授給事乎云方王乎奴止成止毛奴乎王止云止毛汝乃為牟末仁末仁假令後仁帝止立天在人伊立乃後仁汝乃多米仁無禮之旦不従奈賣久在牟人乎方帝乃位仁置許止不得又君臣乃理仁從天貞久浄岐心乎以天助奉侍牟之帝止在己止方得止勅岐可久在御命乎朕又一二乃豎子等止侍天聞食天在然今帝止之天侍人乎此年己呂見仁其位仁毛不堪○淳仁天皇ハ其ノ位ニ堪ヘザル者ト、孝謙天皇ノ詔セシナリ是乃味仁不在今聞仁仲麻呂止同心之天窃朕乎掃止謀家利又窃六千乃兵乎發之等等乃比又七人乃味之天關仁入牟止謀家利精兵乎天之押天之非壞亂天罸滅止云家利故是以帝位乎方退毛賜天親王乃位賜天淡路國乃公止退賜止勅御命乎聞食止宣○孝謙天皇詔シテ淳仁天皇ノ位ヲ廢シテ、更ニ親王トシ、淡路公ト為スヲイフ、コノ淡路公ハ、姓氏ニ上毛野君下毛野君ト云フトハ別ニテ、藤原不比等ヲ淡海公ニ封ズナドト同例ナリ、姓氏ト混ズベカラズ事畢將公及其母到小子門、

庸道路鞍馬騎之右兵衛督藤原朝臣藏下麻呂衛送配所幽于一院勅曰以淡路國賜大炊親王國内所有官物調庸等類任其所用、但出擧官稲一依常例、又詔曰船親王波九月五日尓仲麻呂止二人謀家良久書作天朝庭乃咎計天將進等謀家利又仲麻呂何家物計夫流尓書中尓仲麻呂等通家流謀乃文有、是以親王乃名波下旦諸王等成旦隠岐國尓流賜布又池田親王波此夏馬多集天事謀止所聞支如是在事阿麻多太比所奏是以親王乃名波下賜天諸王旦等志土佐國尓流賜布等詔大命乎聞食止宣○仲恭天皇ノ御兄船親王池田親王モ亦罰セラレテ、親王ヲ降シテ諸王トナスヲイヘリ

水鏡下巻 十月九日太上天皇○孝謙天皇ヲイフつはものを起して内裏をかこみ給ひしかバ、宮のうちに候し人ゝ皆にげ失せにしかば、帝○淳仁天皇ヲイフ御母又わづかのまら王人二三人ばかりをなひ具して、歩行にて図書寮の方におはしてま給

へりしにこそあれハ、少納言むかひ奉りて、位おろし奉る由の宣命をば讀きけ奉りしに、その後ことばなく位をとりて給ふ御さまうつくしきものにおはせねば何ばかりの、仲丸と同じ心なりし、事をそとなりしとはこそ給ひしま、志かれば帝の位を退け給ひて親王の位を給ふにて、淡路の國へ流し奉り給ひてき、心うく侍りし事なり ○此ノ書ニ淳仁天皇ヲ淡路廢帝ト記セリ、續日本紀ニハ廢帝ト記セリ

神皇正統記中巻 第四十七代淡路廢帝ハ云云戊戌の年即位、天下於治め給ふ事六年、事有て淡路の國にうつされ給ひき

皇代記上巻 淡路廢帝云云 天平寶字八年甲辰十月退帝位、賜親王号、年卅三、為淡路公、賜淡路國、高野天皇重祚

皇年代略記上巻 廢帝云云 天平寶字八年甲辰十月日退帝位、賜親王號、為淡路公、即賜當國、卅二 天平神護元年乙巳九月薨 卅三 廢位一年、稱淡路廢帝 ○廢位ハ前天皇アリテ、當天皇ノ皇位ヲ廢セラル、ト、仲恭天皇即チ是ナリ、淳仁天皇ノ自ラ皇位ヲ遜ル、ト異ナル所アルコトハ、各條ニ引ク所ノ書ヲ認メテ知ルベシ、而シテ諸書ニ並ニ廢帝ト称ス、正シカラズトイフベシ

廢位異例

廢位異例トハ、天皇事故アリ、前天皇因テコレヲ廢スルヲイフ、今此ニ其ノ異例ノ名ヲ設クル者ハ、天皇在テ別ニ帝ヲ稱スル者アリ、天皇乃チ其ノ帝ヲ稱スル者ノ位ヲ廢シ、而シテ後太上天皇ノ號ヲ上ルヲイフ

㊀光嚴天皇

光嚴天皇 崇光天皇

皇年代略記下巻 光嚴院云云 正慶二年三月十二日主上光○

（巖天皇ヲイフ）幷兩院（○後伏見天皇花園天皇ヲイフ）幸於六波羅（內侍所同渡御、以北方為皇居、閏二月以來、伯州主上（○後醍醐天皇ヲイフ）出御、天下擾乱之故也、當所探題仲時時益奉保護了）五月七日六波羅城敗績、仲時等奉伴主上上皇（○光嚴天皇後伏見上皇花園上皇ヲイフ）以下赴東國（於江州番場仲時時益等自殺、三主以下御逗留）同十日遷御伊吹山、太平護國寺（暫以此所為御在所）兩院以下又同御此寺、此間為伯州詔命奉退皇位（元号又廢正慶二年、更復元弘三年）同七月八日自江州還幸於京師、十二月十日被獻太上天皇尊號、同日被獻隨身兵杖（○光巖天皇ヲ以テ太上天皇ト為スヲイヘリ）

皇代曆下巻　光嚴院云云正慶二年三月十二日依天下亂行幸六波羅、五月十日赴東國、同廿五日以後廢帝、同年十二月十日太上天皇尊號

神皇正統記下巻　官軍力を得しかば、五月八日都にゐる軍（○北條氏ノ兵ヲイフ）皆やぶれて、あづまへ心ざして落行しに、両院（○後伏見花園両院ヲイフ）新帝（○光嚴天皇ヲイフ）同じく御幸ありし、近江の國

馬場といふ處にて、公家（○後醍醐天皇ヲイフ）にこゝろざしある輩出きければ、武士みな戦ふまでもなく、多くは自滅しぬ、両皇新帝を都にかへし奉り、官軍これを守りゆき、かくて都より西ざまも程なく静まりぬと聞えければ還幸せさせ給ふ（○後醍醐天皇京師ニ還幸アリシヲイフ）誠にめづらしの事なりし事になん云云、いつしかの賞罸行はるべきにありしに、両院新帝をばあがめ給ひて都に住ませましけるに、されど新帝をば偏坐の儀にて、正位には用ゐられず、改元して正慶といひしをも、本のごとく元弘と号せらる

太平記巻九　去程ニ五宮ノ官軍ドモ、主上（○光嚴天皇ヲイフ）上皇（○後伏見花園ノ両上皇ヲイフ）ヲ取進セテ、其日先長光寺ヘ入奉リ、三種神器幷玄象下濃（スソゴ）二間（フタマ）ノ御本尊ニ至ルマデ、自（ヨリ）五宮ノ御方ヘゾ被渡ケル

保暦間記下巻　先帝○後醍醐天皇ヲイフ摂津國西ノ宮迄御上有リ、同六月四日東寺ヘ入セ給テ、同五日ニ威儀ヲ調テ則内裏ヘ入セ給テ、重祚有キ○重祚トセシハ非ナリ重祚ノ部見ルベシ先帝位ニ付セ賜ヒケレバ、後伏見院并先御門○花園天皇光嚴天皇ヲイフハ何ナル目ヲカ見ンズラント思食歎セ給ケレ𪜈、天照大神御計ニヤ、無子細テ都ニ御坐ス、何ニモ後ニ事アルベキニヤトゾ申ケル○此ノ書後醍醐天皇ヲ先帝ト称シ又重祚トイヘルナドハ皆非ナリ、採用スベカラサルナリ、取ルベキモノハ唯其ノ事実ノミ

○崇光天皇

皇年代略記下巻　崇光院云云　觀應二年十一月七日奉廢之武将和睦賀名生君申行之廢觀應号為正平六年十二月廿三日被渡内侍所并神璽於南方○崇光天皇廢セラル、ニ及テ、神器ヲ後村上天皇ニ奉ル、而シテ此ノ神器ヤ真ノ神器ニ非ズ、後醍醐天皇ノ建武三年十一月二日、花山院ニ於テ光明天皇ニ渡サレシ所ノ偽器ナリ同廿八日被奉太上天皇尊號於南方行宮宣下云由翌年正月三日被告申御年十八三年閏二月廿日依新主、天氣○新

主天氣トハ後村上天皇ノ部アルヲイフ渡御八幡軍陣両上皇御同車云云○両上皇ハ光嚴上皇光明上皇ヲイフ三月三日奉移河州東條云云○崇光天皇ノ後村上天皇ニ廢セラル、ヲイフ

皇代記下巻　崇光院云云　觀應二辛卯年正平六年十一月、正平六年云云此年号暫時、穴太宮○後村上天皇ヲイフ即位云云被称賀名生云云

太平記巻卅　足利宰相中將義詮朝臣ハ、將軍○尊氏ヲイフ鎌倉ヘ下リ給シ時、京師守護ノ為ニ被残坐シケルガ、關東ノ合戰ノ左右ハ未聞、京師ハ以外ニ無勢ナリ、角テハ如何様和田楠ニ被寄テ無云甲斐京ヲ被落ヌトオボシケレバ、一旦事ヲ謀テ暫ク洛中ヲ無為ナラシメン為ニ、吉野殿○後村上天皇ヲイフヘ使者ヲ立テ、自今以後ハ御治世ノ御事ト、國衙郷保并ニ本家領家年来進止ノ地ニ於テハ、武家一向其綺ヒヲ可止ニテ候、只承久以後新補ノ率法並ニ國々守護職地頭御家人所帯ヲ武家ノ成敗ニ被許テ、君臣和睦ノ恩恵ヲ被施候バ、武臣七徳ノ干

戈ヲ收メテ聖主萬歳ノ寶祚ヲ可奉仰ト頻ニ奏聞ヲゾ被経ケル、依之諸卿僉議有テ先ニ直義入道和睦ノ由ヲ申テ言下ニ變ジヌ、是モ又偽テ申ス條無子細覺レ共、謀ノ一途タレバ先義詮ガ被任申旨帝都還幸ノ儀ヲ催シ、而シテ後ニ義詮ヲバ畿内近國勢ヲ以テ退治シ、尊氏ヲバ義貞ガ子共ニ仰付テ則被追罸ニ何ノ子細カ可有トテ、御問答再往ニモ不及御合體ノ事子細非ジトゾ被仰出ケル、両方互ニ偽給ヘル趣誰カハ可知ナレバ、此間持明院殿方ニ被拜趨ケル諸卿皆賀名生殿ノ○後村上天皇皇居ヲイフへ被参、先當職ノ公卿ニハ二條關白太政大臣良基公云云禪律ノ長老寺社ノ別當神主ニ至ルマデ、我先ニト馳参リケル間、サシモ淺猿シク賤シゲナリシ賀名生ノ山中如花隠映シテ、如何ナル辻堂温室風呂マデモ幔幕引カヌ所モ無リケリ、今參候スル所ノ諸卿ノ叙位轉任ハ、悉ク持明

院殿ヨリ被成タル官途ナレバトテ、各一級一階ヲ被貶ケルニ云云山中伺候ノ公卿殿上人ヲバ、多年勞功アリトテ超涯不次ノ賞ヲ被行ケル間、窮達忽ニ地ヲ易ヘタリ云云憂カリシ正平六年ノ歳晩テ、アラタマノ春立ヌレトモ、皇居ハ猶モ山中ナレバ、白馬踏歌ノ節會ナンドハ不被行云云二月廿六日主上○後村上天皇ヲイフ己ニ山中ヲ御出有テ、瑤輿ヲ先ヅ東條へ被促、劔璽役人計衣冠正シクシテ被供奉、其外月卿雲客衛府諸司ノ尉ハ、皆甲冑ヲ帶シテ前驅後乘ニ相從フ云云同十九日八幡へ行幸成テ、田中法印ガ坊ヲ皇居ニ被成、赤井大渡ニ關ヲ居テ、兵山上山下ニ充満タルハ、混ラ合戰ノ御用意ナリト洛中ノ聞エ不穏依之義詮朝臣法勝寺慧鎮上人ヲ使ニテ、臣不臣ノ罪ヲ謝シテ勅免ヲ可蒙由申入ル、處ニ、照臨己ニ下情ヲ被恤、上下和睦ノ義事定リ候ヌル上ハ、何事ノ用心カ候

ベキニ、和田楠以下ノ官軍等混ラ合戰ノ企アル由承及候、如何様ノ子細ニ候ヤラント被申タリ、主上直ニ上人ニ御對面有テ、天下未恐懼ヲ懐ク間、只非常ヲ誡メン爲ニ官軍ヲ被召具トイヘドモ、君臣己ニ和睦ノ上ハ更ニ異變ノ義不可有、縱讒者ノ説アリ共胡越ノ心ヲ不存バ、太平ノ基タルヘシト勅答有テゾ被返ケル、綸言已ニ如此士女ノ説何ゾ用ル處ナラント、義詮朝臣ヲ始トシテ京都ノ軍勢曽テ令被出抜トハ夢ニモ不知、由断シテ居タル處ニ、同二十七日ノ辰ノ剋ニ中院右衛門督顯能三千餘騎ニテ、鳥羽ヨリ推寄テ東寺ノ南羅城門ノ東西ニシテ旗ノ手ヲ解キ、千種少將顯經五百餘騎ニテ丹波路唐櫃越ヨリ押寄テ西七條ニ火ヲ揚ル、和田楠三輪越知真木神宮寺其勢都合五千餘騎、宵ヨリ桂川ヲ打渡テマダ篠目ノ明ヌ間ニ、七條大宮ノ南北七八町ニ村立テ鬨ヲゾ揚タリケル、東寺大宮ノ時ノ聲七條口ノ烟ヲ見テ、スハヤ楠寄タリト京中ノ貴賤上下遽騒グ事不斜云云細河讃岐守ハ被討ヌ、陸奥守ハ何地共不知落行ヌ、今ハ重テ可戰兵無カリケレバ、宰相中將義詮朝臣僅ニ百四五十騎ニテ近江ヲ差テ落給フ云云去程ニ敵ハ都ヲ落タレドモ、吉野ノ帝〇後村上天皇ヲイフハ洛中ヘ臨幸モ不成只北畠入道准后顯能卿父子計リ、京師ニ坐シテ諸事ノ成敗ヲ司リ給テ、其外月卿雲客ハ皆主上御坐ニ付テ八幡ニゾ伺候シ給ケル、同二十三日中院中將具忠ヲ勅使ニテ、都ノ内裏ニ御座ス三種神器ヲ吉野ノ主上ヘ渡シ奉ル〇崇光天皇ノ神器ヲ後村上天皇ニ渡シ奉ルヲイフ是ハ先帝〇後醍醐天皇ヲイフ山門ヨリ武家ヘ被渡タリシ物ナレバトテ、璽ノ御箱ヲバ被棄、寶劍ト内侍所トヲバ、近習ノ雲客ニ被下テ、衛府ノ太刀装束ノ鏡ニゾ被成ケル、ゲニモ誠ノ三種神器ニテハナケレドモ、

已ニ三度大甞會ニ逢テ、毎日ノ御神拝清暑堂ノ御神樂、二十餘年ニ成ヌレバ、神靈モナドカ無カルベキニ、餘ニ無レ恐凡俗ノ器物ニ被レ成ヌル事、如何アルベカラント申ス族モ多カリケリ、同二十七日北畠右衛門督顕能兵五百餘騎ヲ卒シテ、持明院殿ヘ参リ、先其邊ノ辻辻門門ヲ堅メサセケレバ、スハヤ武士共ガ参テ院内ヲ失ヒ進ラセントスルハトテ、女院皇后御心ヲ迷ハシテ臥沈マセ給フ、内侍上童上臈女房ナドハ、向後モ不レ知逃フタメイテ此彼ニ立吟フ、サレドモ顕能御穏カニ西ノ小門ヨリ参テ、四條大納言隆蔭卿ヲ以テ、世ノ靜リ候ハン程ハ、皇居ヲ南山ニ移シ進ラスベシトノ勅定ニテ候ト被レ奏ケレバ、両院〇光嚴天皇光明天皇ヲイフ主上〇崇光天皇ヲイフ東宮〇直仁親王ヲイフアキレサセ給ヘル計ニテ、兎角ノ御言ニモ不レ及、只御泪ニノミシヲレサセ給テ、羅穀ノ御袂ヲ絞計ニ成ニケリ、良暫有テ

新院〇光明天皇ヲイフ御泪ヲ押テ被レ仰ケルハ、天下乱ニ向フ後僅ニ帝位ヲ雖レ踐、叡慮ヨリ起リタル事ニ非レバ、一事モ世ノ政ヲ御心ニ不レ任、北辰光消テ中夏道闇キ時ナレバ、共ニ椿嶺ノ陰ニモ寄リ、遠ク花山ノ跡ヲモ追ハドヤトコソ思召ツレドモ、其モ叶ハヌ折節ノ憂サ、豈叡察ナカラシヤ、今天運膺圖萬人望ヲ達スル時至レリ、乾臨曲テ恩免ヲ蒙ラバ、速ニ釋門ノ徒ト成テ、邊鄙ニ幽居ヲ卜ント思フ、此一事具ニ可レ有二奏達一ト被二仰出一ケレ共、顕能再往ノ勅答ニモ不レ及、已ニ綸命ヲ蒙ル上ハ、押ヘテハ如何カ奏聞ヲ經候ベキトテ、御車ヲ二両差寄セ、餘ニ時刻移候ト急ケバ、本院新院主上春宮御同車有テ、南ノ門ヨリ出御ナル云云、鳥羽マデ御幸成タレバ、夜ハ早若々ト明ハテヌ、此ニ御車ヲ駐メテ、怪ゲナル鑾輿ニ名替サセ進セ、日ヲ經テ吉野ノ奥賀名生ト云フ所ヘ御幸成シ奉ル〇正平六年後村上

天皇ノ崇光天皇ヲ廢セシコト、太平記ニ記スル所甚委シ故ニ事長ケレド此ニ載セ、以テ其ノ情實ヲ詳ニス

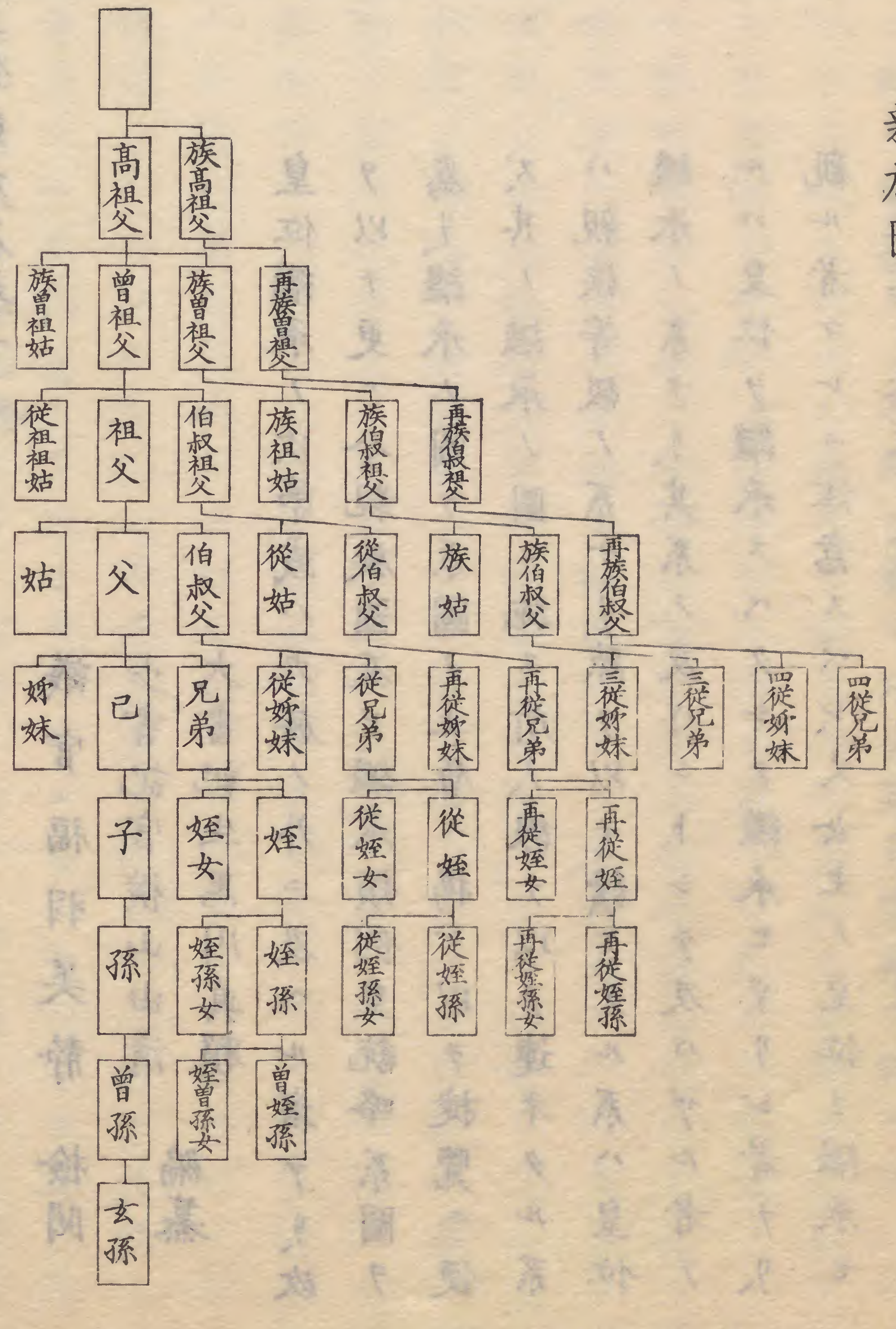
皇位繼承篇卷九終

皇位繼承篇卷十

議官 福羽美靜 撿閲
少書記官 横山由清
大書記生 黒川真頼 編纂

皇位繼承ノ次第或ハ九族ノ外ニ及ベル者アリ、故ヲ以テ更ニ今親族圖及ビ繼承類例皇統略系圖ヲ爲リ、繼承ノ圖ヲ系圖ノ上層ニ掲ゲ以テ捷覽ニ便ズ、其ノ繼承ノ圖ニ施ス所ノ、線ヲ以テ連ネタル系ハ親族等級ノ系ナリ、點ヲ以テ續ケタル系ハ皇位繼承ノ系ナリ、其系ノ及バントシテ及バザル者アルハ皇位ヲ繼承スベクシテ繼承セザリシ者ナリ、觀ル者コレニ注意スベシ、又女主ノ皇位ヲ繼承セシ大意ヲ卷末ニ附シテ以テ參考ニ備フ

親族圖



繼承類例

父ノ後ヲ子ノ繼承セシ例

父天皇崩ズ子皇太子嗣グ、父天皇讓ル子皇太子受ク、父天皇崩ズ子親王皇子嗣グ、父天皇讓ル子親王皇子内親王皇女嗣グ、父天皇讓ル子親王皇子内親王皇女受クルノ類ナリ、但シ事故アル者ハ再タビ別條ニ掲グル者アリ、綏靖天皇ハ父ノ後ヲ子ノ繼承セシ例ナレドモ兄ヲ超テ弟ノ繼承セシ條ニモ再タビ掲グルノ類ナリ、以下皆コレニ傚ヘ

六十二帝

綏靖　安寧　懿徳　孝昭　孝安　孝霊　孝元　開化
崇神　垂仁　景行　成務　應神　仁徳　履仲　安康
清寧　武烈　安閑　敏達　弘文　孝謙　桓武　平城　文徳
清和　陽成　宇多　醍醐　朱雀　冷泉　後冷泉　白河　堀河
鳥羽　崇徳　二條　六條　安徳　土御門　仲恭　四條　後深草
後宇多　後伏見　後村上　後亀山　後圓融　稱光　後土御門　後柏原　後奈良
正親町　後水尾　明正　東山　中御門　櫻町　桃園　仁孝　孝明
今上

兄ヲ超エテ弟ノ繼承セシ例

二帝 綏靖 顯宗

祖父ノ後ヲ嫡孫ノ繼承セシ例

一帝 後陽成

祖母ノ後ヲ嫡孫ノ繼承セシ例

一帝 文武

兄ノ後ヲ弟ノ繼承セシ例

二十帝 反正 允恭 雄畧 宣化 欽明 用明 崇峻 嵯峨 淳和 村上 圓融 後朱雀 後三條 近衛 順德 亀山 光明 後光嚴 後西院 靈元

姊ノ後ヲ弟ノ繼承セシ例

二帝 孝德 後光明

伯父ノ後ヲ姪女ノ繼承セシ例

一帝 皇極

叔父ノ後ヲ姪ノ繼承セシ例

二帝 仲哀 花山

叔父ノ後ヲ姪女ノ繼承セシ例

一帝 持統

姑ノ後ヲ姪ノ繼承セシ例

二帝 聖武 後桃園

從伯父ノ後ヲ從姪ノ繼承セシ例

一帝 後一條

從姑ノ後ヲ從姪女ノ繼承セシ例

一帝 元正

從祖祖姑ノ後ヲ姪孫ノ繼承セシ例

一帝 舒明

族叔祖父ノ後ヲ從姪孫女ノ繼承セシ例

一帝　稱徳

從兄弟ノ後ヲ從兄弟ノ繼承セシ例

三帝　一條 三條 伏見

再從兄弟ノ後ヲ再從兄弟ノ繼承セシ例

五帝　顯宗 後嵯峨 後二條 花園 後醍醐

族兄弟ノ後ヲ族兄弟ノ繼承セシ例

一帝　後花園

四從兄弟ノ後ヲ四從兄弟ノ繼承セシ例

一帝　繼體

弟ノ繼承スベキヲ兄ノ繼承セシ例

一帝　仁徳

弟ノ後ヲ兄ノ繼承セシ例

二帝　仁賢 後白河

弟ノ後ヲ姉ノ繼承セシ例

三帝　推古 齊明 後櫻町

姪ノ後ヲ叔父ノ繼承セシ例

二帝　天武 高倉

姪孫ノ後ヲ叔祖父ノ繼承セシ例

一帝　光孝

從姪ノ後ヲ從姑ノ繼承セシ例

一帝　元明

從姪ノ後ヲ從伯父ノ繼承セシ例

一帝　後堀河

從姪孫女ノ後ヲ族叔祖父ノ繼承セシ例

一帝　淳仁

再從姪ノ後ヲ族叔父ノ繼承セシ例

一帝 光格

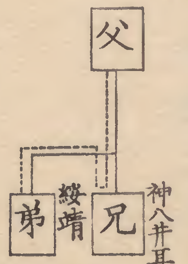
再從姪孫女ノ後ヲ再族伯祖父ノ繼承セシ例

一帝 光仁

皇統畧系圖

皇位ノ繼承ヲ分類スレバ綏靖天皇ヨリ今上ニ至テ凡テ廿八種ナリ、其ノ中ニ父ノ後ヲ子ノ繼承セシ例ハ、系圖ニ於テ一目瞭然ナレバ煩シク贅セズ、其ノ他兄ヲ超エテ弟ノ繼承セシ例ヨリ以下再從姪孫女ノ後ヲ再族伯祖父ノ繼承セシ例ニ至テ、凡テ廿七種ハ其ノ跡ノ異ナル者ニシテ、施ス所ノ等親ノ地位モ亦速ニ會得シ難キ者アリ、故ニ皇統畧系圖ヲ作リ繼承ノ圖ヲ其ノ上層ニ記シ、且ツ皇太子日嗣皇子等ノ繼承セズシテ薨ゼシ者、其ノ或ハ事故アリテ繼承セザリシ者等ノ傳説ヲ略記シ、併セテ一覽ニ便ナラシム

○兄ヲ超エテ弟ノ繼承セシ例



- 第一代 神武天皇
  - 手研耳命　庶子ナルヲ以テ皇位ヲ繼承セズ、叛クニ及デ誅セラル
  - 神八井耳命　綏靖天皇ノ兄ナリ且日嗣皇子ナレドモ、弟綏靖天皇ノ功徳アルニ譲リテ皇位ヲ繼承セズ
  - 第二代 綏靖天皇
- 第三代 安寧天皇
- 第四代 懿徳天皇
- 第五代 孝昭天皇
- 第六代 孝安天皇

第七代 孝靈天皇

第八代 孝元天皇

第九代 開化天皇

第十代 崇神天皇

第十一代 垂仁天皇

第十二代 景行天皇

日本武尊

日本武尊ハ日嗣皇子ナレドモ東征シテ途ニ崩ズ、故ヲ以テ皇位ヲ繼承スルニ及バズ

第十三代 成務天皇

按ズルニ天皇ハ父天皇ノ意ヲ察シ皇位ヲ子ニ傳ヘズシテ姪仲哀天皇ニ傳フル歟、天皇在世ノ中皇后ヲ立テザリシモ亦以テ見ルベキナリ

○叔父ノ後ヲ姪ノ繼承セシ例

景行 □

日本武 □ ― 仲哀 姪

成務 叔父 ― 和珂奴氣 □

和珂奴氣王

第十四代 仲哀天皇

麛阪皇子

忍熊皇子

麛阪忍熊ノ二皇子ハ並ニ應神天皇ノ兄ナリ、而レドモ皇后ノ生メル所ニ非ズ、故ヲ以テ日嗣皇子ト称セズ、叛クニ及デ誅セラル

□

此ノ皇子ノ名詳ナラズ、按ズルニ譽屋別皇子歟

第十五代 應神天皇

大山守皇子

庶子ナルヲ以テ皇太子ニ立タズ、叛シテ誅セラル

第十六代 仁德天皇

天皇ハ父天皇ノ意ニ随テ皇位ヲ繼承スルヲ欲セズ、皇太子菟道稚

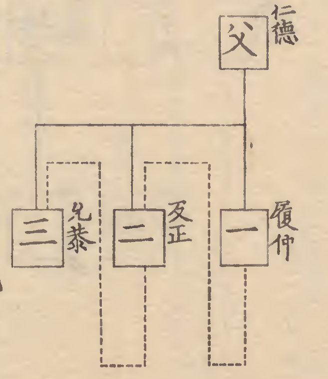
○弟ノ繼承スベキヲ兄ノ繼承セシ例

應神 父

仁德 兄

菟道稚郎子 弟

○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



兄弟ノ地位ニ一二三ト記シタルハ一子二子三子ノコトニ非ズ唯順序ヲ知ラシムルノミ

郎子ノ皇子薨ズルニ至テ已ムコトヲ得ズ皇位ヲ継承ス

菟道稚郎子皇子

父應神天皇特ニ皇子ヲ愛シ立テ皇太子ト為ス、皇子兄ニ越ユルヲ以テ意ニコレヲ適セリト為ズ、父天皇崩ズルニ及デ皇位ヲ継承スルヲ辞シテ自殺ス

稚渟毛二派皇子

第十七代
履仲天皇

子孫下ニ出ヅ

住吉仲皇子

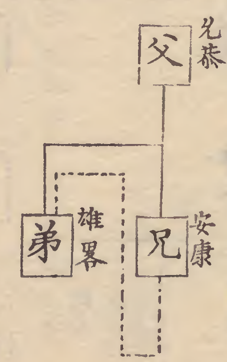
皇子ハ兄履仲天皇ニ叛シテ誅セラル

第十八代
反正天皇

天皇ハ兄履仲天皇ニ忠アリ履仲天皇因テ皇太子ト為ス、但シ履仲天皇皇子無キニアラズ、

第十九代
允恭天皇

○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



○再従兄弟ノ後ヲ再従兄弟ノ継承セシ例

天皇ノ兄反正天皇崩ズ嗣無シ、天皇因テ皇位ヲ継承ス

木梨軽皇子

皇子ハ立テ皇太子タリ、婬乱ナルヲ以テノ故ニ同母弟ノ安康天皇ニ殺サル

第二十代
安康天皇

天皇ハ兄軽皇子ノ婬乱ナルヲ以テ殺シテ皇位ヲ継承ス、天皇子無シ

第廿一代
雄畧天皇

天皇ノ兄安康天皇崩ズ、子無シ因テ立テ皇位ヲ継承ス

磐城皇子

皇子ハ弟星川皇子ノ叛ヲ援ケテ誅セラル、皇子ハ庶子ナリ

第廿二代
清寧天皇

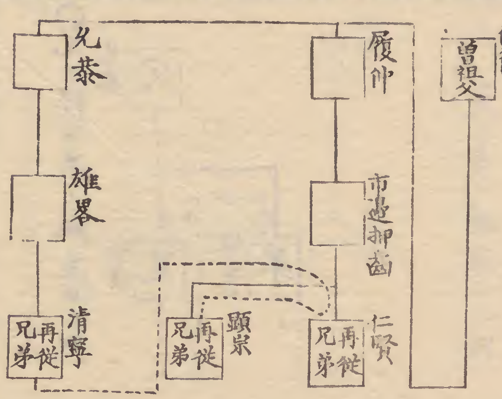
天皇ハ皇子皇女共ニ無シ

星河皇子

父雄畧天皇豫テ皇子ノ叛センコ

トヲ知ル、天皇崩ズルニ及デ果シテ叛ス、清寧天皇ニ誅セラル

○兄ヲ超エテ弟ノ継承セシ例



市邊押歯皇子（履仲天皇皇子）

皇子ハ履仲天皇ノ子ナルヲ以テ、安康天皇コレニ國ヲ傳ヘント欲ス、果サズシテ崩ズ、雄略天皇コレヲ知ル、安康天皇ノ崩ズルニ及デ皇子俄ニ雄略天皇ニ殺サル、雄略天皇ノ此ノ皇子ヲ殺シヽハ、代リ立タンコトヲ猜忌セシナルベシ

飯豊青尊

仁賢顕宗ノ二天皇相讓テ皇位ニ即カズ、其ノ間皇女朝ニ臨テ政ヲ聴ク

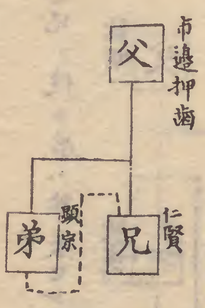
仁賢天皇（第廿四代）

天皇ハ顕宗天皇ノ兄ナリ、而レドモ其ノ弟ノ功勞アルヲ以テ辞シテ皇位ヲ継承セズ、弟天皇崩ズルニ及デ立テ寶位ニ即ク

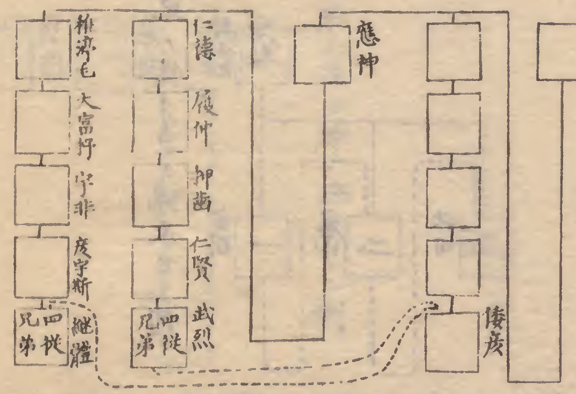
顕宗天皇（第廿三代）

仁賢顕宗ノ二天皇ハ、父ノ難ニ遭ヒシトキ逃レテ播磨ニ走ル、後清寧天皇コレヲ召ス、清寧天皇崩ズ、天皇兄ノ意ニ従テ皇位ヲ継承ス、天皇子無シ

○弟ノ後ヲ兄ノ継承セシ例



○四従兄弟ノ後ヲ四従兄弟ノ継承セシ例



武烈天皇（第廿五代）

天皇子無シ

仲哀天皇二世孫 — 三世孫 — 四世孫

倭彦王（五世孫）

武烈天皇崩ジテ嗣ナシ、群臣相議シテ仲哀天皇五世孫倭彦王ヲ迎ヘ、皇位ヲ継承セシメント計ル、王迎兵ヲ望ミ見テ大ニ驚キ、急ニ山谷ニ逃ル其ノ到ル所ヲ知ラズ

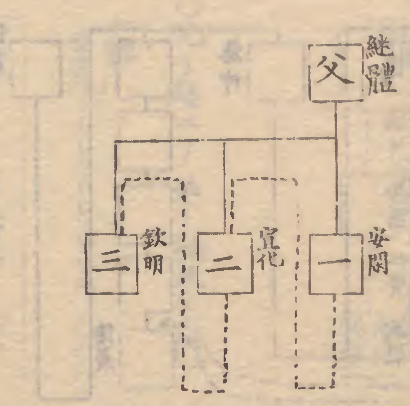
應神天皇二世孫 大富杼王 — 三世孫 宇非王 — 四世孫 彦宇斯王

繼體天皇（第廿六代 五世孫）

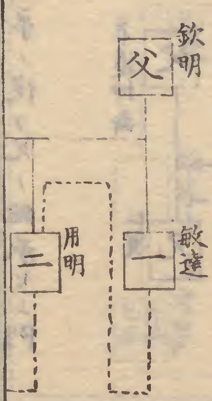
武烈天皇崩ズ嗣無シ、群臣相議シ

テ仲哀天皇五世ノ孫倭彦王ヲ迎ヘントス王逃ル、群臣因テ更ニ議ヲ定メテ、應神天皇五世ノ孫ヲ迎ヘテ之ヲ立ツ、是ヲ繼體天皇トイフ

○兄ノ後ノ弟ノ繼承セシ例



○兄ノ後ヲ弟ノ繼承セシ例



第廿七代
安閑天皇

天皇子アリ而レドモ幼クシテ皇位ヲ繼承スルコト能ハザリシ歟、其ノ他猶故アル歟、

第廿八代
宣化天皇

天皇子アリ、コレモ亦其ノ皇位ヲ繼承セザリシ所由ヲ詳ニセズ

第廿九代
欽明天皇

箭田珠勝大兄皇子

皇子ハ父欽明天皇在位ノ中ニ薨ズ

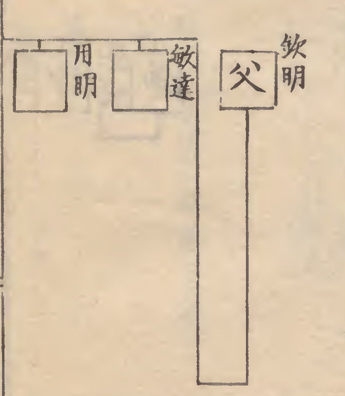
第三十代
敏達天皇

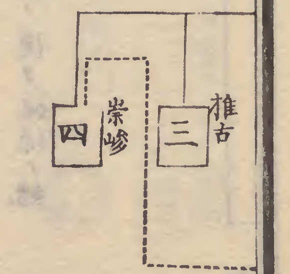
天皇ハ兄箭田珠勝大兄皇子薨ゼシヲ以テ、立テ皇位ヲ繼承ス

押坂彦人大兄皇子

皇子ノ中ニ大兄ト称スルハ日嗣皇子ナリ、皇子ハ大兄ヲ以テ称ス、日嗣皇子ナリシコト見ルベシ其ノ皇位ヲ繼承セザリシ所以詳ナラズ、人或ハイハン皇子ハ日嗣皇子ナリ、而レドモ父天皇在位中薨ゼシナラン、故ヲ以テ皇位ヲ繼承スルニ及バザリシナラント、然ラズ皇子ハ推古天皇ノ御宇マデモ尚存在セリ、其ノ故ハ舒明天皇ヲ推古天皇ノ元年ニ生ミタレバナリ、其ノ後尚數子ヲ生メリ

○弟ノ後ヲ姉ノ繼承セシ例



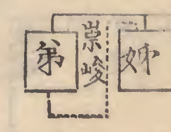


第三十一代
用明天皇

敏達天皇崩ジテ後、押坂彦人大兄皇子宜シク皇位ヲ繼承スベシ、而ルニ天皇皇位ヲ繼承ス、其ノ然ル所以ヲ詳ニセズ、按ズルニ押坂彦人大兄皇子、未ダ幼稚ナルヲ以テノ故ナル歟

第三十三代　女主
推古天皇

天皇ノ弟崇峻天皇暴ニ崩ズ、崇峻天皇皇子アリ、而レドモ群臣コレヲ奉載セズシテ天皇ヲ奉載ス、天皇群臣ノ勧進ニ從テ皇位ヲ繼承



ス、是本邦女主ノ始ナリ是ノ時ニ当テ押坂彦人大兄皇子厩戸皇子アリ、而レドモ群臣ノ意コヽニ帰セズ、遂ニ女主ニ定マル

穴穂部皇子

用明天皇崩ズ、大連物部守屋独皇子ヲ立テ天皇トセント欲ス、大臣蘇我馬子等コレヲ不可ナリトス、皇子馬子ニ害セラル

崇峻天皇

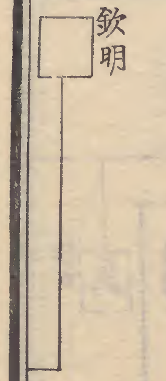
第三十二代

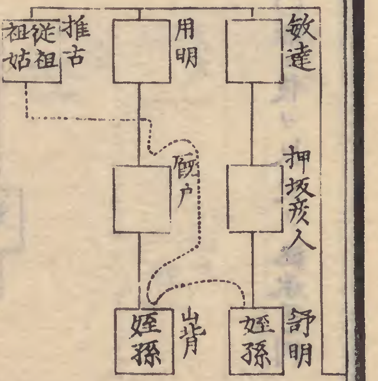
用明天皇崩ズ皇子（厩戸皇子）アリ、然レドモ妕（推古天皇）ト群臣トノ勧進ニ従テ皇位ヲ継承ス、既ニシテ天皇大臣蘇我馬子ノ専横ヲ悪ム、馬子コレヲ含ム、天皇馬子ニ弑セラル、天皇皇子アリ而レドモ立ラレズ、天皇ノ妕コレニ代ル、

厩戸皇子

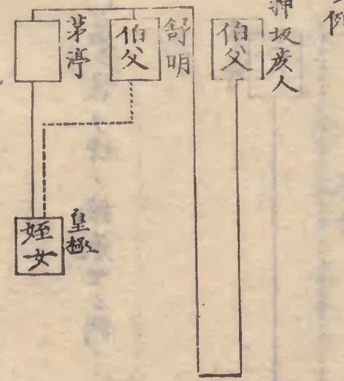
皇子ノ姑推古天皇立ツ、皇子ヲ立テ皇太子ト為ス、推古天皇在位ノ中ニ薨ズ

○従祖祖姑ノ後ヲ姪孫ノ継承セシ例

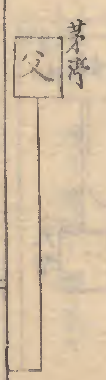




○伯父ノ後ヲ姪女ノ継承セシ例



○妕ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



山背大兄王

舒明天皇

第三十四代　敏達天皇孫押坂彦人大兄皇子子

推古天皇崩ズルニ臨テ、天皇（田村皇子）ト山背大兄王トニ遺言シテ天皇位ノ継承ハ自然ニ定マルニ従ハシメテ、自ラコレヲ冀望セザラシム、天皇ト山背大兄王トハ、共ニ推古天皇ノ兄ノ孫ニシテ姪孫ニ当レリ、群臣相議シテ天皇ヲ勧進ス、天皇乃チ皇位ヲ継承ス

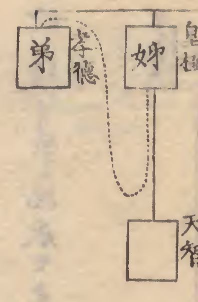
茅渟王

按ズルニ茅渟王ハ舒明天皇皇位ヲ継承セザリシ前ニ薨ゼシナラン、舒明天皇即位ノ後薨ゼシナラバ、天皇ノ弟ニ当ルヲ以テノ故ニ茅渟皇子トゾ称スベキ

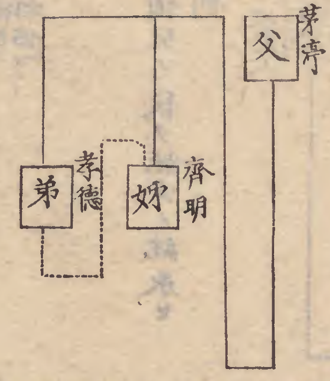
皇極天皇

第三十五代　女主　第三十七代　重祚斉明天皇

天皇ハ舒明天皇ノ皇后ニシテ天智天皇ノ母ナリ、按ズルニ舒明天



○弟ノ後ヲ姉ノ継承セシ例



○姪ノ後ヲ叔父ノ継承セシ例

皇崩ジテ皇子尚幼シ、故ヲ以テ天皇位ヲ継承セシナラン

第三十六代
孝德天皇

天皇ノ姉皇極天皇皇位ヲ皇子ニ譲ラズシテ之ヲ天皇ニ傳フ、天皇辭スルコト能ハズシテ皇位ヲ継承ス

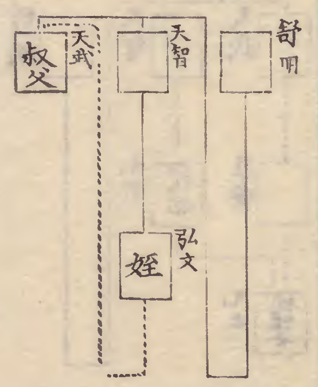
有間皇子

父孝德天皇崩ジテ後皇子叛シテ誅セラル

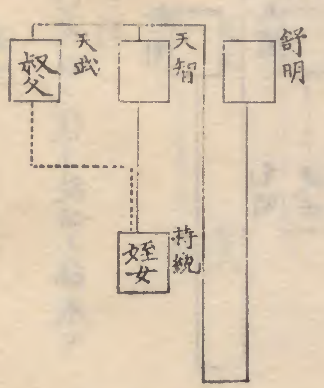
古人大兄皇子

皇子ト中大兄皇子天智天皇トハ共ニ日嗣皇子ナリ、父舒明天皇崩ズ皇子宜シク皇位ヲ継承スベシ、而シテ皇子ノ時ニ立タザリシコトハ年稚キヲ以テノ故歟、皇極天皇立ツ皇極天皇位ヲ孝德天皇ニ譲ルニ方テ、孝德天皇コレヲ皇子ニ譲ル、皇子固辭シ遂ニ僧トナル、後謀叛ス事覺レテ誅ニ伏ス

第三十八代
天智天皇



○叔父ノ後ヲ姪女ノ継承セシ例



○祖母ノ後ヲ嫡孫ノ継承セシ例

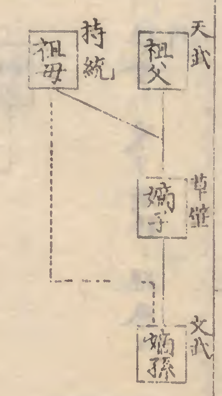
父舒明天皇崩ズ天皇宜シク皇位ヲ継承スベシ、按ズルニ年幼キヲ以テ未ダ立タザル歟、母皇極天皇立ツ、皇極天皇皇位ヲ譲ルニ及デ天皇中臣鎌足ノ策ヲ用井テ之ヲ辭シ、叔父孝德天皇ニ傳ヘンコトヲ奏ス、母天皇コレニ從テ弟孝德天皇ニ傳フ、孝德天皇崩ズ、皇極天皇因テ重祚ス是ヲ齊明天皇トイフ、齊明天皇崩ズ、是ニ於テ天皇皇位ヲ継承ス

第四十代
天武天皇

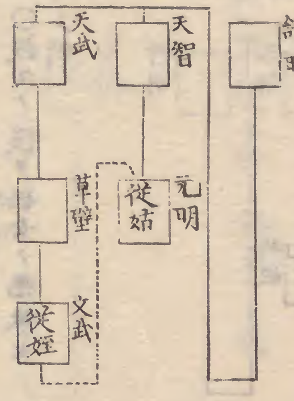
天皇ハ兄天智天皇ノ時立テ皇太弟タリ、天智天皇大漸ニ臨テ皇位ヲ天皇ニ傳ヘントス、天皇固辭ス、天智天皇ノ意ヲ弘文天皇ニ属セルヲ以テナリ、天智天皇崩ズ弘文天皇立ツ、弘文天皇陰ニ天皇ヲ伐タント謀ル、遂ニ交、兵ヲ發シ大ニ戦フ、天皇勝ヲ得タリ因テ皇位ヲ継承ス

第四十一代　女主
持統天皇

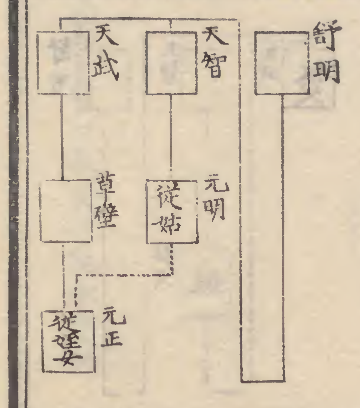
天皇ハ叔父天武天皇ノ皇后ナリ、天武天皇崩ズ皇子草壁アリ年未ダ長セズ、故ヲ以テ天皇皇位ヲ継承ス



○従姪ノ後ヲ従姑ノ継承セシ例



○従姑ノ後ヲ従姪女ノ継承セシ例



元明天皇　第四十三代　女主

天皇ハ皇太子草壁ノ妃ナリ、皇太子草壁ハ持統天皇在位ノ中ニ薨ズ、草壁皇子アリ、天皇ノ生ム所ナリ、立ツ、是ヲ文武天皇トイフ、文武天皇崩ズ、文武天皇子アリ聖武天皇年尚幼シ、其ノ長ズルヲ竢ツノ間天皇皇位ヲ継承ス

弘文天皇　第三十九代

天皇ハ叔父天武天皇ヲ討ントシテ反リテ破ラレテ自殺ス

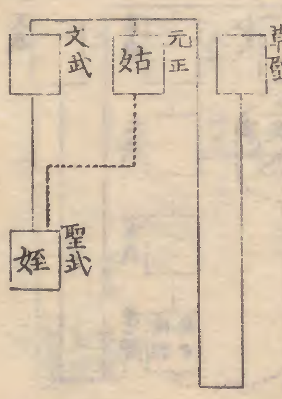
施基皇子

草壁皇子

皇子ハ母持統天皇ノ在位ノ中ニ薨ズ

舎人親王

○姑ノ後ヲ姪ノ継承セシ例



新田部親王

高市皇子

皇子ハ草壁皇子薨ジテ後皇太子ニ立ツ、持統天皇在位ノ中ニ薨ズ

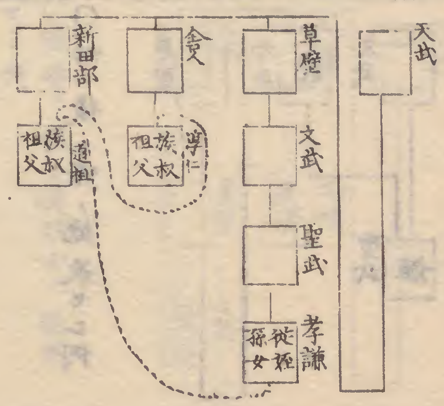
元正天皇　第四十四代　女主

従姑元明天皇皇位ヲ聖武天皇ニ傳ヘントト欲ス、聖武天皇年未ダ長セズ、故ヲ以テ天皇皇位ヲ継承シ、以テ聖武天皇ノ長ズルヲ竢ツ

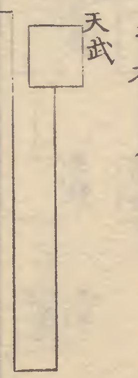
文武天皇　第四十二代

天皇ノ父草壁皇子皇位ヲ継承スルニ及バズシテ薨ズ、時ニ天皇幼シ、叔父高市皇子立テ皇太子ト為ル、高市皇子モ亦薨ズ、是ノ時ニ當テ天皇既ニ長ジ皇太子ニ立ツ、祖母持統天皇遂ニ皇位ヲ天皇ニ傳フ、是本邦ニ於テ嫡孫承祖ノ始ナリ

○從姪孫女ノ後ヲ族叔祖父ノ継承セシ例



○族叔祖父ノ後ヲ從姪孫女ノ継承セシ例



第四十五代
聖武天皇

天皇ノ父文武天皇崩ズ天皇時ニ年未ダ長ゼズ、元明元正ノ二天皇相継テ立ツ、元正天皇皇位ヲ辞スルニ及テ天皇之ヲ継承ス

女主 第四十六代第四十八代
孝謙天皇

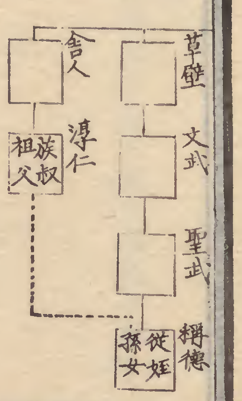
天皇重祚ス後世ニ至テ重祚ヲ称シテ称徳天皇トイヒ以テ前世ニ別ツ

父聖武天皇皇子アリ以テ皇太子ト為ス、皇子薨ズ故ヲ以テ皇位ヲ天皇ニ傳フ、天皇ハ女主ナリ、女主ハ其ノ傳フベキ者無シ聖武天皇因テ詔シテ道祖王ヲ立テ天皇ノ皇太子ト為ス、後事故アリ道祖王ハ廢セラル、是ヨリ先女主數帝アリ、皆位ヲ継承スベキ皇子アリト雖ドモ而レドモ事故アルヲ以テ數年ノ間皇位ヲ継承シ、或ハ皇子ノ年未長ゼザルヲ以テ皇位ヲ継承シテ以テ其ノ長ズルヲ竢シナリ、孝謙天皇ハ獨然ラズ委シク女主ノ皇位ヲ継承セシ大意ノ條ニ辨ズ就テ見ルベシ

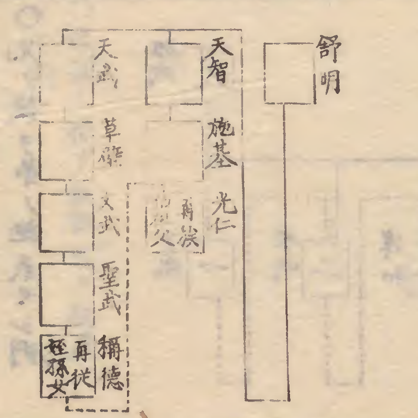
皇子

基王 基王ハ神亀四年閏九月廿九日生ル孝謙天皇ニ後ル、コト八年ナリ

皇子ハ皇太子ト為リテ後一年ヲ經テ薨ズ



○再從姪孫女ノ後ヲ再族伯祖父ノ継承セシ例



第四十七代 天武天皇孫舎人親王子
淳仁天皇

孝謙天皇嗣无シ、因テ天皇ヲ以テ皇太子ト為シ以テ皇位ヲ譲ル、天皇乃皇位ヲ継承ス、後數年ニシテ孝謙天皇ニ廢セラル

道祖王

天武天皇孫新田部親王子

孝謙天皇嗣无シ、因テ道祖王ヲ以テ皇太子ト為ス、既ニシテ道祖王孝謙天皇ノ意ニ協ハズ皇太子ヲ廢セラル、淳仁天皇代テ皇太子ト為ル

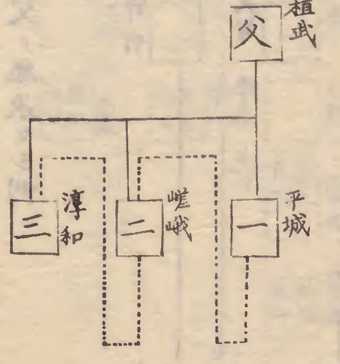
第四十九代 天智天皇孫施基皇子子
光仁天皇

天皇ノ再從姪孫稱德天皇崩ズ、天皇稱德天皇ノ遺詔ニ従テ皇位ヲ継承ス

第五十代
桓武天皇

天皇ハ母ノ卑シキヲ以テ初メ皇太子タラズ、後皇太子ト為リテ皇位ヲ継承ス

○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



早良親王

親王ハ父光仁天皇ノ詔ニ依テ立テ兄桓武天皇ノ皇太子トナル、事故アリテ廢セラル

第五十一代
平城天皇

高岳親王

親王ハ叔父嵯峨天皇ノ皇太子トナル、父平城天皇ノ事ニ依テ廢セラレテ僧トナル、真如親王即チ是ナリ

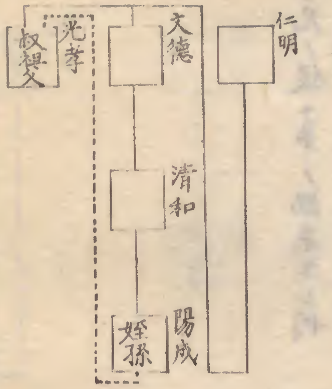
第五十二代
嵯峨天皇

天皇ハ兄平城天皇ノ讓ヲ受ク、故ヲ以テ兄ノ子高岳親王ヲ立テ皇太子ト為シテ、之ニ皇位ヲ傳ヘント欲ス、既ニシテ平城天皇ノ事アリ、因テ高岳親王ヲ廢シテ、皇位ヲ弟淳和天皇ニ傳フ

第五十三代
淳和天皇

天皇ハ兄嵯峨天皇ノ讓ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、故ニ子ヲ以テ皇太

○姪孫ノ後ヲ叔祖父ノ継承セシ例



子ト為ズ兄ノ子ヲ以テ皇太子ト為ス、禮讓ヲ貴ブナリ

恒貞親王

親王ハ従兄弟仁明天皇ノ皇太子ト為ル、事故アリテ廢セラル

第五十四代
仁明天皇

天皇ハ叔父淳和天皇ノ讓ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、故ニ子ヲ以テ皇太子トセズ、叔父ノ子恒貞親王ヲ以テ皇太子ト為ス、恒貞親王不軌ヲ圖ルト聞テコレヲ廢シ、代フルニ子文徳天皇ヲ以テス

第五十五代
文徳天皇

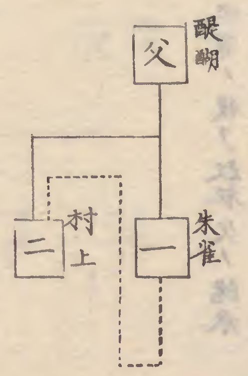
第五十六代
清和天皇

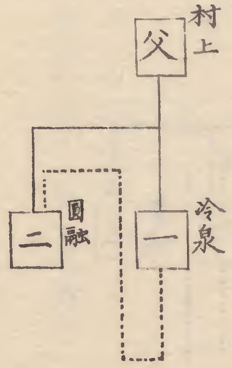
第五十七代
陽成天皇

天皇喜怒常ナラズシテ遜位ス、但シ皇子數人アリ

第五十八代
光孝天皇

○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例





○叔父ノ後ヲ姪ノ継承セシ例

姪孫陽成天皇喜怒常ナラズ、群臣因テ天皇ヲ勧進ス、天皇乃チ皇位ヲ継承ス

第五十九代 宇多天皇

第六十代 醍醐天皇

保明親王

親王ハ立テ皇太子ト為ル、父醍醐天皇在位ノ中ニ薨ズ

慶頼王

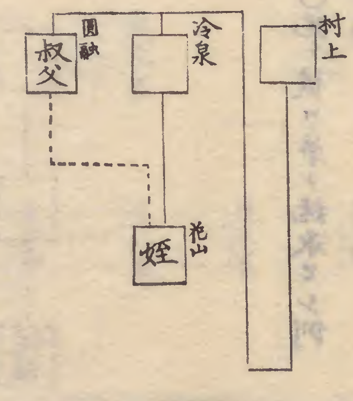
父保明親王薨ズ、王立テ皇太子ト為ル、王亦祖父醍醐天皇在位ノ中ニ薨ズ

第六十一代 朱雀天皇

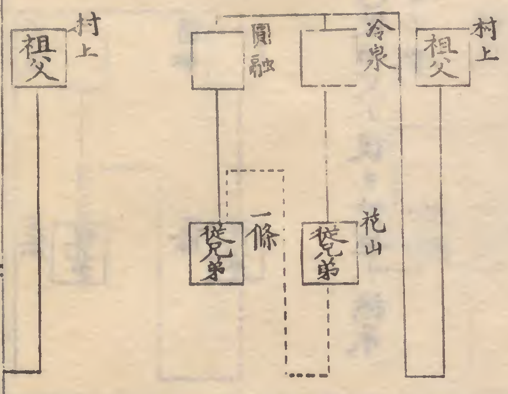
父醍醐天皇皇位ヲ保明親王ニ傳ヘント欲ス、保明親王薨ズ、因テ孫慶頼王ニ傳ヘント欲ス亦薨ズ、故ヲ以テ天皇ニ傳フ、天皇乃チ皇位ヲ継承ス、天皇皇子無シ

第六十二代 村上天皇

兄朱雀天皇皇子無シ、天皇因テ皇位ヲ継承ス



○従兄弟ノ後ヲ従兄弟ノ継承セシ例



第六十三代 冷泉天皇

第六十四代 圓融天皇

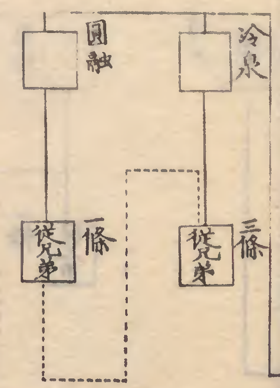
天皇ハ兄冷泉天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、冷泉天皇皇子（花山天皇）アリ、年幼キヲ以テノ故ニ皇位ヲ傳ヘザルカ

第六十五代 花山天皇

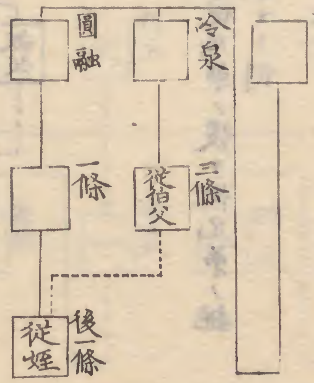
天皇ハ叔父圓融天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、故ヲ以テ叔父ノ子（一條天皇）ヲ以テ皇太子ト為ス、事故アリテ遜位ス、遜位ノ後天皇皇子数人ヲ生ム

第六十六代 一條天皇

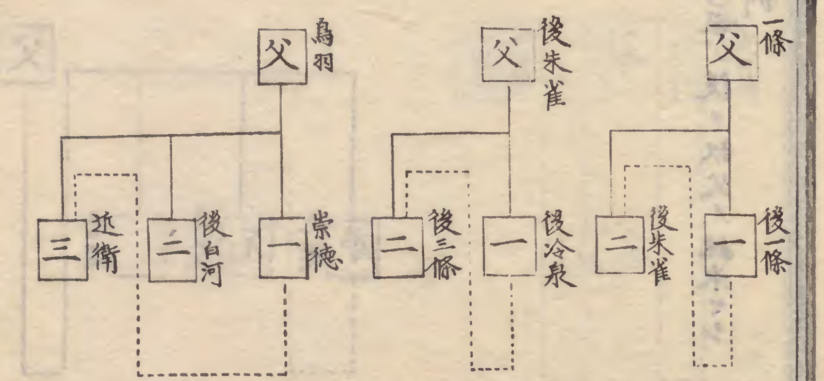
天皇ノ父圓融天皇禮譲ノ意ヲ用テ、皇位ヲ子ニ傳ヘズシテ姪花山天皇ニ傳フ、花山天皇モ亦禮譲ノ意ヲ用テ、従兄弟一條天皇ヲ以テ



○従伯父ノ後ヲ従姪ノ継承セシ例



○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



皇太子ト為ス、花山天皇遜位ノ後天皇皇位ヲ継承ス

第六十七代
三條天皇

天皇ノ従兄弟一條天皇ハ花山天皇ノ譲ヲ受ク、故ニ禮譲ノ意ヲ用ヰテ、皇位ヲ子ニ傳ヘズシテ之ヲ天皇ニ傳フ、天皇ハ花山天皇ノ弟ナリ

第六十八代
後一條天皇

天皇ノ従伯父三條天皇ハ一條天皇ノ譲ヲ受ク、故ニ禮譲ノ意ヲ用テ皇位ヲ天皇ニ譲ル、天皇乃立ツ、天皇モ亦禮譲ノ意ヲ用テ三條天皇ノ子(敦明親王ニテ即小一條院ナリ)ヲ立テ以テ皇太子ト為ス、但シ天皇ハ皇子ナシ

敦明親王

親王ノ再従兄弟後一條天皇ハ三條天皇ノ譲ヲ受ク、故ニ禮譲ノ意ヲ以テ親王ヲ立テ皇太子ト為ス、親王ハ後一條天皇ヨリ年長ズルコト十四歳ナリ、親王遂ニ皇太子ヲ辞ス、小一條院ト称ス

第六十九代
後朱雀天皇

天皇ハ兄後一條天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス

第七十代
後冷泉天皇

天皇皇子無シ、故ヲ以テ皇位ヲ弟後三條天皇ニ傳フ

第七十一代
後三條天皇

天皇ハ兄後冷泉天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス

第七十二代
白河天皇

實仁親王

親王ハ兄白河天皇ノ皇太弟ニ立ツ、白河天皇在位ノ中ニ薨ズ

第七十三代
堀河天皇

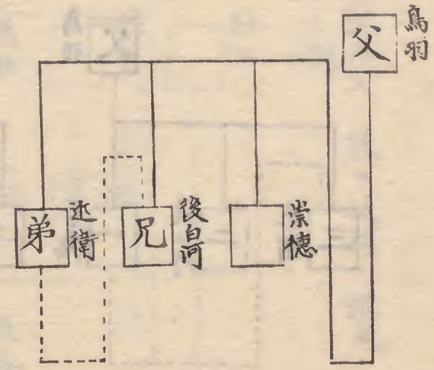
第七十四代
鳥羽天皇

第七十五代
崇德天皇

天皇ハ父鳥羽天皇ト相善カラズ、近衛天皇崩ジテ皇子無シ、天皇因

テ重祚セント欲シ、或ハ皇子重仁親王ヲ以テ皇位ヲ継承セシメント欲ス得ズ、弟後白河天皇立ツ、天皇意ニ不平ヲ懐ク遂ニ保元ノ乱アリ、軍破ル、ニ及デ天皇讃岐ニ遷幸ス

〇弟ノ後ヲ兄ノ継承セシ例



〇姪ノ後ヲ叔父ノ継承セシ例

第七十七代 後白河天皇

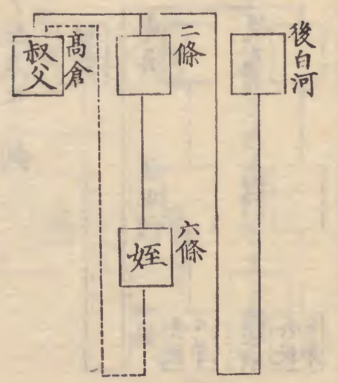
天皇ノ弟近衛天皇崩ズ皇子無シ、天皇因テ皇位ヲ継承ス、兄崇徳天皇意ニ甚ダ不平ヲ懐ク

第七十六代 近衛天皇

兄崇徳天皇皇位ヲ譲ル天皇コレヲ受ク、天皇崩ズ、皇子無シ、崇徳天皇因テ子重仁親王ヲシテ皇位ヲ継承セシメント欲ス得ズ、後白河天皇立ツ

重仁親王

親王ノ父崇徳天皇皇位ヲ近衛天皇ニ譲ル、近衛天皇崩ズ、皇子無シ、崇徳天皇因テ親王ヲシテ皇位ヲ継承セシメント欲ス得ズ



〇兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例

第七十八代 二條天皇

第七十九代 六條天皇

天皇ハ祖父後白河天皇ノ意ニ従テ、皇位ヲ叔父高倉天皇ニ傳ス、天皇時ニ年五歳ナリ、十三歳ニシテ崩ズ

第八十代 高倉天皇

天皇ハ父後白河天皇ノ意ニ従テ皇位ヲ継承ス

第八十一代 安徳天皇

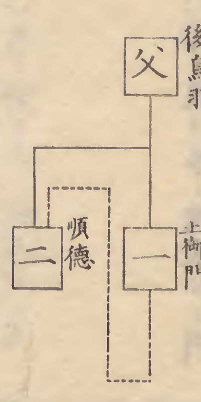
天皇事故アリテ西海ニ崩ズ

守貞親王

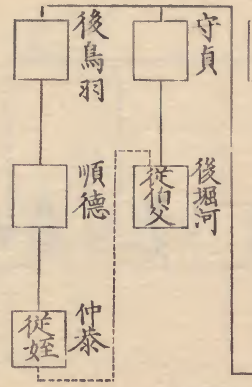
親王ハ祖父後白河天皇ノ意ニ適セザルヲ以テ皇位ヲ継承セズ

第八十二代 後鳥羽天皇

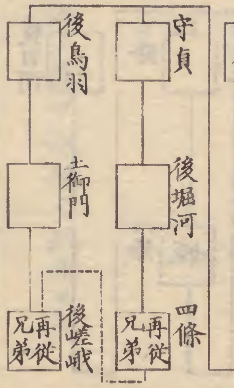
天皇ノ兄安徳天皇事故アリテ西海ニ遷幸ス、京師ニ主無シ、天皇祖父後白河天皇ノ詔ニ従テ皇位ヲ継承ス、天皇初ハ不正位後正位ナリ



○従姪ノ後ヲ従伯父ノ継承セシ例



○再従兄弟ノ後ヲ再従兄弟ノ継承セシ例



第八十三代
土御門天皇
天皇ハ父後鳥羽天皇ノ意ニ従テ皇位ヲ弟順徳天皇ニ傳フ

第八十四代
順徳天皇
天皇ハ父ノ意ニ従テ兄土御門天皇ノ譲ヲ受ク

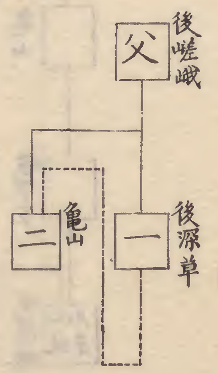
第八十五代
仲恭天皇
承久ノ乱アリ天皇因テ遜位ス、皇子ナシ

第八十六代
後堀河天皇
天皇ハ北條義時ノ勧進ニ従テ皇位ヲ継承ス

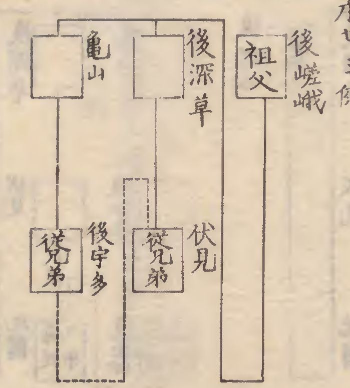
第八十七代
四條天皇
天皇年十二歳ニシテ崩ズ子無シ

第八十八代
後嵯峨天皇
天皇ノ再従兄弟四條天皇崩ズ、天皇北條泰時ノ勧進ニ従テ皇位ヲ継承ス

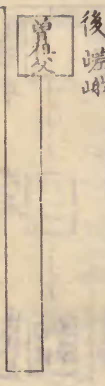
○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



○従兄弟ノ後ヲ従兄弟ノ継承セシ例



○再従兄弟ノ後ヲ再従兄弟ノ継承セシ例



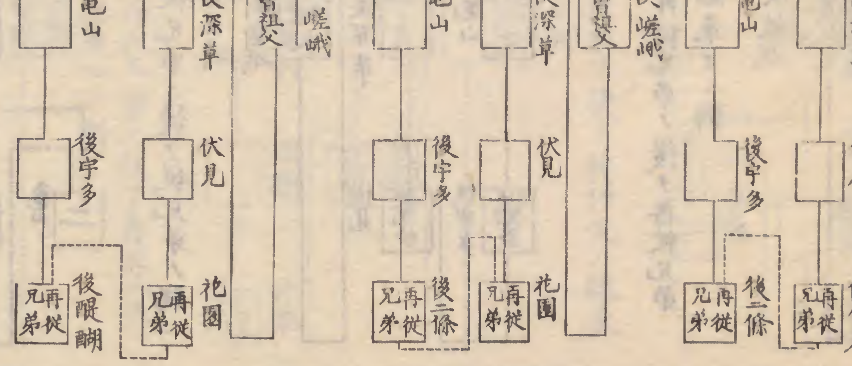
第八十九代
後深草天皇
天皇ハ父後嵯峨天皇ノ意ニ従テ皇位ヲ弟亀山天皇ニ傳フ

第九十代
亀山天皇
天皇ハ父後嵯峨天皇ノ意ニ従テ兄後深草天皇ノ譲ヲ受ク、而シテ後コレヲ子世仁親王（後宇多天皇）ニ傳フ、亦後嵯峨天皇ノ意ニ従フナリ

第九十一代
後宇多天皇
天皇ハ北條貞時ノ奏スル所ニ従テ、皇位ヲ従兄弟伏見天皇ニ傳フ

第九十二代
伏見天皇
天皇ハ北條貞時ノ奏スル所ニ従テ、従兄弟後宇多天皇ノ皇太子ト為リ、遂ニ皇位ヲ継承ス

第九十三代
後伏見天皇
天皇ハ北條貞時ノ奏スル所ニ従テ、皇位ヲ再従兄弟後二條天皇ニ



傳フ

第九十四代 **後二條天皇**

天皇ハ北條貞時ノ奏スル所ニ従テ、再従兄弟後伏見天皇ノ譲ヲ受ケ皇位ヲ継承ス

第九十五代 **花園天皇**

天皇ハ北條貞時ノ奏スル所ニ従テ再従兄弟後二條天皇ノ皇太子トナリ、遂ニ皇位ヲ継承ス

第九十六代 **後醍醐天皇**

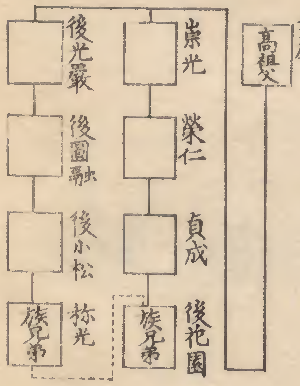
天皇ハ北條高時ノ奏スル所ニ従テ、再従兄弟花園天皇ノ譲ヲ受ケ皇位ヲ継承ス

邦良親王

親王ハ北條高時ノ奏スル所ニ従テ、叔父後醍醐天皇ノ皇太子トナル、後醍醐天皇在位ノ中ニ薨ズ

第九十七代 **後村上天皇**

○族兄弟ノ後ヲ族兄弟ノ継承セシ例



第九十八代 **後亀山天皇**

天皇事故アリテ皇位ヲ後小松天皇ニ傳フ

良泰親王

親王立テ皇太子トナル、事故アリテ皇位ヲ継承セズ

不正位 **光厳天皇**

不正位 **光明天皇**

不正位 **崇光天皇**

不正位 **後光厳天皇**

不正位 **後圓融天皇**

第九十九代 初不正位 後正位 **後小松天皇**

天皇事故アリテ後嵯峨天皇五世ノ孫後亀山天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、天皇ハ後嵯峨天皇七世ノ孫ナリ

第百代 **称光天皇**

天皇皇子無シ

崇光天皇子 **榮仁親王**——**貞成親王**

第百一代
後花園天皇

天皇ノ族兄弟称光天皇崩ズ皇子無シ、天皇因テ皇位ヲ継承ス

第百二代
後土御門天皇

第百三代
後柏原天皇

第百四代
後奈良天皇

第百五代
正親町天皇

誠仁親王

親王ハ父正親町天皇在位ノ中ニ薨ズ、故ニ皇位ヲ継承セズ

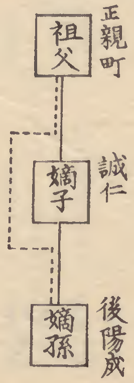
第百六代
後陽成天皇

天皇ハ父誠仁親王薨ゼシヲ以テノ故ニ、祖父正親町天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、嫡孫承祖ナリ

第百七代
後水尾天皇

天皇萬機ニ倦ミテ皇位ヲ譲ラント欲ス、皇子アリ先ダチテ薨ズ、故ヲ以テ皇女興子内親王明正天皇ニ傳フ

○祖父ノ後ヲ嫡孫ノ継承セシ例



第百八代 女主
明正天皇

父後水尾天皇皇子ノ薨ゼシヲ以テ皇位ヲ天皇ニ傳フ

第百九代
後光明天皇

天皇ハ父後水尾天皇譲位ノ後生ル、姉明正天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、天皇崩ズ皇子無シ

第百十代
後西院天皇

天皇ノ兄後光明天皇崩ジテ皇子無シ、故ヲ以テ天皇皇位ヲ継承ス、天皇皇子アリ而シテ皇位ヲ子ニ傳ヘズシテ弟ニ傳フ、其ノ所以如何ナルヲ知ラズ

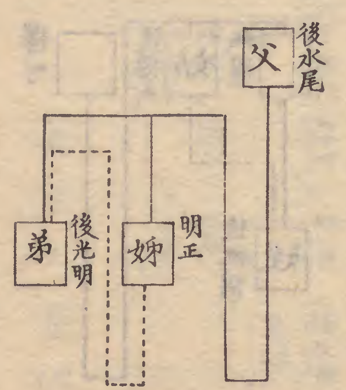
第百十一代
霊元天皇

天皇ハ兄後西院天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス

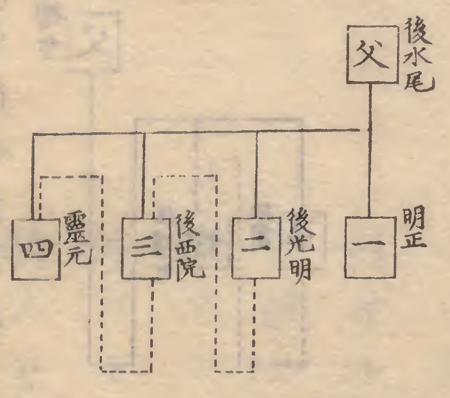
第百十二代
東山天皇

第百十三代
中御門天皇

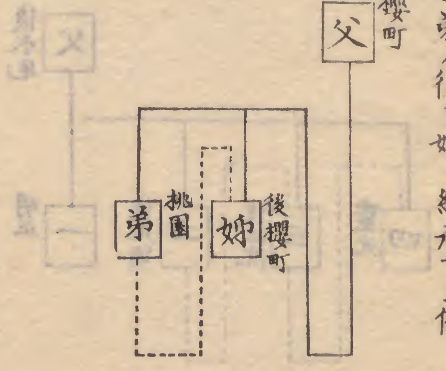
○姉ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



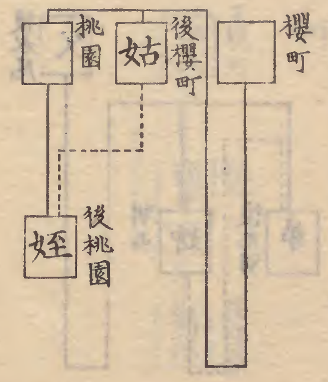
○兄ノ後ヲ弟ノ継承セシ例



○弟ノ後ヲ姉ノ継承セシ例



○姑ノ後ヲ姪ノ継承セシ例



○再従姪ノ後ヲ族叔父ノ継承セシ例

第百十四代 櫻町天皇

第百十六代 女主 後櫻町天皇

天皇ノ弟桃園天皇崩ジテ、皇子年未ダ長ゼズ、天皇群臣ノ勧進ニ従テ皇位ヲ継承シ、以テ桃園天皇ノ皇子ノ長ズルヲ竢ツ

第百十五代 桃園天皇

天皇ハ父櫻町天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、天皇崩ズ時ニ皇子（英仁親王ニテ即後桃園天皇ナリ）年未ダ長ゼズ

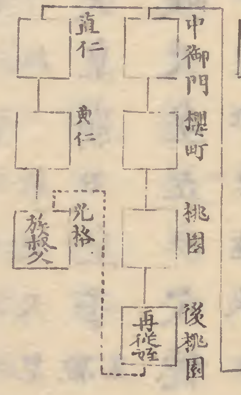
第百十七代 後桃園天皇

天皇ハ姑後櫻町天皇ノ譲ヲ受ケテ皇位ヲ継承ス、天皇崩ズ皇子無シ

直仁親王 — 典仁親王

第百十八代 東山天皇曾孫 光格天皇

天皇ハ再従姪後桃園天皇ノ遺詔ニ従テ皇位ヲ継承ス



第百十九代 仁孝天皇

第百二十代 孝明天皇

第百廿一代 今上

女主ノ皇位ヲ継承セシ大意

皇位ノ継承ハ男子コレヲ承ク是恒典ナリ、女子代ハッテコレヲ承クルハ時ニ事故アリテ已ムコトヲ得ザルニ出デ、而シテ必ス竢ツコトアルナリ、其ノ竢ツコトアリトイフハ何ゾ、其ノ立ツベキ皇子アリト雖ヘドモ、年尚幼ケレバ其ノ長ズルヲ竢ツト、皇子年長ズト雖ヘドモ事故アリテ其ノ時ノ至ルヲ竢ツトナリ、故ニ今其ノ大意ヲ略記シテ以テ捷覧ニ備フ

推古天皇　皇極天皇　持統天皇　元明天皇
元正天皇　孝謙天皇　明正天皇　後櫻町天皇

本邦ニ於テ皇女女王ノ皇位ヲ繼承セシコトハ額田部皇女ニ始マル、額田部皇女ハ欽明天皇ノ皇女ニシテ、箭田珠勝大兄皇子、敏達天皇、用明天皇ノ妹、穴穂部皇子、崇峻天皇ノ姉ナリ、箭田珠勝大兄皇子ハ欽明天皇ノ在位ノ中ニ薨ズ、敏達天皇因テ皇位ヲ繼承ス、敏達天皇崩ズ、皇子押坂彦人大兄皇子年幼クシテ父ノ後ヲ嗣グコト能ハズ、用明天皇因テ代リ立ツ○本邦ノ制中世ニ至テ、皇太子年未ダ長セズトイヘドモ、群臣勸進シテ之ヲ立テ、大臣ノ中一人萬機ヲ攝スルノ典アリ、上古ハ然ラズ、萬機ヲ親ラ決スルコト能ハザレバ、皇位ヲ繼承セザリシナリ、故ニ敏達天皇崩ジテ用明天皇立ツ、亦當然ノ理ナリ用明天皇崩ズ、皇子厩戸皇子年幼クシテ父ノ後ヲ嗣グコト能ハズ、崇峻天皇立ツ、穴穂部皇子ハ故アリテ立タズ○用明天皇崩ジテ皇子厩戸皇子ノ皇位ヲ繼承セザリシ故ハ、押坂彦人大兄皇子ノ例ニ同ジ、順序ヲ以テイハヾ宜シク穴穂部皇子立ツベシ、穴穂部皇子ハ妹額田部皇女ノ意ニ適セズ、群臣モ亦素行ノ修ラザルヲ以テノ故ニ之ヲ奉戴セズ、是ニ於テ崇峻天皇立ツ崇峻天皇蘇我馬子ニ弑セラル、崇峻天皇皇子アリ群臣之ヲ奉戴セズ額田部皇女ヲ勸進ス、皇女因テ皇位ヲ繼承ス、是ヲ推古天皇トイフ、天皇時ノ至ルヲ竢テ寳位ヲ厩戸皇子ニ傳ヘント欲スルコトハ、皇子ヲ立テヽ皇太子ト為スニテ瞭然タリ○崇峻天皇崩ズ、皇子蜂子皇子アリ、群臣コレヲ奉戴セズ、額田部皇女ヲ奉戴シ皇位ヲ繼承セシコトヲ勸進ス、額田部皇女遂ニ皇位ニ即ク、是ノ時ニ當テ敏達天皇ノ皇子押坂彦人大兄皇子アリ、又用明天皇ノ皇子厩戸皇子アリ、共ニ先代ノ嫡子ニシテ殊ニ押坂彦人大兄皇子ハ日嗣皇子ナリ、皇統ノ傳コヽニ及バズシテ額田部皇女立ツ、後世疑ナキコト能ハズ、因テ按ズルニ父天皇崩ズ子日嗣皇子アリ、而レドモ年幼クシテ萬機ヲ決スルコト能ハザレバ、父ノ弟皇位ヲ繼承ス、コレ上古ノ習慣ニシテ世人モ亦以テコレヲ間然セザリシナリ、押坂彦人大兄皇子ハ日嗣皇子ナリトイヘドモ而レドモ叔父用明天皇立ツニ及デハ、用明天皇ノ後ヲ必受クベキ皇子ニ非ラズ、是日嗣皇子ト皇太子ト差別アリテ少異アル所以ナリ、故ニ日嗣皇子ハ年未ダ長ゼズシテ父天皇崩ズレバ、其ノ名ハ大兄皇子日嗣皇子ノ称ナリヲ以テ称トストイヘドモ、世人必ズシモ其ノ皇子ヲ以テ皇位ヲ繼承スベキ者ト認メズ、皇太子ハ然ラズ父天皇崩ズトイヘドモ、皇子ノ皇太子ト称スル者ハ、世人

必ズ皇位ヲ継承スル者ト認ム、故ニ事故アルニ至テハ皇太子ノ位ヲ廢シ太子ヲ改メテ皇子ト称ス、大兄皇子ハ後主ノ更ニコレヲ立ツルニ及テハ皇太子其ノ大兄皇子ト重ネテ称ス、所謂ル皇太子中大兄皇子天智天皇即チ是ナリ、因テ又按ズルニ日嗣皇子トイヘドモ、其ノ立ツニ及バズシテ其ノ時ヲ過セバ、皇子ハ普通ノ皇子ニ等シ、押坂彦人大兄皇子ノ遂ニ立タザリシ所以モ亦以テ知ルベキナリ、廐戸皇子ハ固ヨリ日嗣皇子ニ非ラズ、又父用明天皇崩ゼシ時ハ年幼クシテ萬機ヲ決スルコト能ハズ、其ノ立タザリシモ宜ナリ、敏達用明崇峻ノ三天皇兄弟相継テ皇位ヲ継承ストイヘドモ、而レドモ其ノ崩ズルニ至テ、其ノ皇子ノ并ニ皆其ノ後ヲ受ケザリシモ亦相似タリ、後世ノ人此ニ注意シテ以テ、當時ノ情実ヲ察セズバアルベカラサルナリ、當時親ラ萬機ヲ決スルニ堪ヘテ皇位ヲ紹承スベキ者ハ額田部皇女ニ非ラズシテ誰ソヤ、實ニ已ムコトヲ得ザルニ出ヅルナリ、推古天皇紀ヲ按ズルニ、額田部皇女乃チ皇位ヲ継承シテ廐子皇子ヲ皇太子ト為ス、知スベシ天皇時ノ至ルヲ竢テコレニ皇位ヲ傳ヘント欲スルコトヲ

寶女王ハ敏達天皇ノ曾孫ニシテ、茅渟王ノ女孝徳天皇ノ姉ナリ、立チテ舒明天皇ノ皇后ト為ル、舒明天皇崩ズ、天皇皇子數人アリ、中ニ古人大兄皇子中大兄皇子倶ニ日嗣皇子ナリ

○大兄皇子ト稱スル者ハ、皆日嗣皇子ナルコト日嗣皇子ノ條ニ辨ズ

而レドモ二皇子倶ニ立

タズ、皇后寶女王立ツ、是ヲ皇極天皇トイフ、皇極天皇ノ立ツヤ、其ノ生ム所ノ日嗣皇子中大兄皇子ノ年長ズルヲ竢チシナラン

○舒明天皇崩ズ、日嗣皇子古人大兄皇子理宜シク立ツベシ、而シテ立タズ皇后寶皇女立ツ、後世疑ナキコト能ハズ、因テ按ズルニ古人大兄皇子ハ春秋已ニ富メリ萬機ヲ決スルニ難カラズ、而シテ其ノ立タザリシ所以ハ、皇子ハ皇后寶女王ノ生メル所ニ非ラズ、蘇我馬子ノ女法提郎女ノ生ム所ニシテ、其ノ性モ亦賢ト稱スルニ足ラズ、中大兄皇子ハ皇后ノ生ム所ニシテ、天資聰明ナリ群臣之ヲ奉戴ス、而レドモ皇子年未ダ長ゼズ、是ニ於テ群臣ニ皇子ノ中ヲ擇ビテ勧進セズシテ皇后ヲ勧進セシモノ歟、皇后ハ毎ニ古道ヲ順考シテ而シテ政ヲ為スト、其ノ非凡ナルコト以テ知ルベシ、但シ群臣ノ皇后ヲ勧進セシコトハ日本紀ニ所見ナシ、因テ又按ズルニ日嗣ノ二皇子ナドノ倶ニ勧進セシモノ歟、當時ノ情實ヲ考フルニ此ノ二説ノ外ニ出ヅベカラズ、是ニ由テ之ヲ観レバ寶女王ノ皇位ヲ継承セシハ、實ニ已ムコトヲ得ザリシナリ、女王ノ皇位ヲ継承スルニ至テハ、古人大兄皇子ハ尋常ノ皇子ノ如ク、中大兄皇子ハ日嗣皇子ノ地位動カズシテ仍故ノ如クナルコト、前條ニ辨ゼルガ如シ

既ニシテ蘇我入鹿ノ事アリ、天皇因テ皇位ヲ中大兄皇子ニ傳ヘズシテ弟孝徳天皇ニ傳フ

○日嗣皇子中大兄皇子立タズシテ孝徳天皇ノ皇位ヲ継承セシコトハ、中臣鎌足ノ策ニ従フナリ、事ハ日本書紀ニ詳ナリ

孝

徳天皇崩ズ、皇極天皇再祚ス是ヲ齊明天皇トイフ○孝徳天皇崩ズ中大兄皇子宜シク立ツベシ、而ルニ皇子ノ立タズシテ母天皇重祚スル所以ハ、皇子親ラ謙遜シテ母ニ隨フノ意ヲ表セシナラン女主再タビ祚ニ登リシコトハ天津日嗣高御座ノ御業ハ重事ナリ、皇太子中大兄皇子因テ皇位ニ即カズ、母天皇再タビ皇位ニ即キシナラン○神皇正統記中巻ニ云ク、我朝ハ皇極の重祚を齊明と号し、孝謙の重祚を稱徳と号す、異朝ハ習れう、是天日嗣を重くするゆゑなり、先賢の義さゞめてよりあるふや云云皇太子と申ハ中大兄皇子の御事なり、孝徳の御代より太子ふ立給ふ、此御時ハ摂政し給ふと見えたり云云トアリ、天智天皇皇位ヲ継承セズシテ、御母ヲ奉戴シ再タビ祚ニ登ラシメ、己萬機ヲ輔翼セシコト此ノ文ニ據テ見ルベキナリ皇極天皇再祚シテ而シテ後時ノ至ルヲ竢テ寶位ヲ中大兄皇子ニ傳ヘント欲スルコトハ、皇子ヲ立テ、皇太子ト為スニテ瞭然タリ鸕野讃良皇女ハ天智天皇ノ皇女ニシテ、元明天皇弘文天皇ノ姉ナリ、立チテ天武天皇ノ皇后ト為ル、天武天皇崩ズ皇子草壁皇子アリ、時ニ年廿五歳ナリ立タズ、皇子ノ母皇后鸕野讃良皇女立ツ、コレヲ持統天皇トイフ、天皇ノ立ツヤ抑、所以アリ○此ノ事ハ下ニ辨ズ亦以テ已ムコトヲ得ザルニ出ヅルナリ○天武天皇崩ズ、皇子草壁皇子理宜シク立ツベシ、而ルヲ皇后鸕野讃良皇女立ツ、必ズ事故ナキヲ得ベカラザルナリ、因テ按ズルニ天武天皇ハ草壁皇子ノ外ニ皇子数人アリテ、中ニ父ノ後ヲ継承セント冀望スル者ナキニ非ズ、皇后因テ之ヲ慮リ己立テ皇位ヲ継承シ、而シテ後草壁皇子ニ傳フルノ意ナランキ天武天皇崩セシ歳大津皇子ノ反逆ノ事アリ以テ見ルベキナリ

阿閇皇女ハ天智天皇ノ皇女ニシテ、持統天皇ノ妹弘文天皇ノ姉ナリ、立チテ皇太子草壁皇子ノ妃ト為リテ文武天皇ヲ生ム、持統天皇皇位ヲ文武天皇ニ傳フ、文武天皇崩ズ皇子首皇子聖武天皇アリ時ニ年尚幼シ、母阿閇皇女立テ皇位ヲ繼承シ、以テ首皇子ノ長ズルヲ竢ツ、實ニ已ムコトヲ得ザルナリ、是ヲ元明天皇トイフ○文武天皇疾アリ其ノ起ツベカラサルヲ計リ、皇位ヲ母阿閇皇女ニ讓ラント欲ス、阿閇皇女固辭ス、天皇崩ズ、阿閇皇女因テ已ムコトヲ得ズシテ立テ皇位ヲ継承シ、以テ孫首皇子ノ長ズルヲ竢ツコト

ハ、已ムコトヲ得ザルナリ

氷高内親王ハ天武天皇ノ孫ニシテ草壁太子ノ子文武天皇ノ姊ナリ、文武天皇崩ズ、皇子首皇子年尚幼シ、元明天皇乃(ナ)立チ、以テ首皇子ノ長ズルヲ竢ツ、元明天皇疾アリ萬機ヲ決スルコト能ハザルニ至テ、皇位ヲ首皇子ニ傳ヘント欲ス年未ダ長ゼズ、故ヲ以テ首皇子ノ姑氷高内親王ニ傳ヘ、以テ其ノ姪ノ長ズルヲ竢タシム、氷高内親王立ツ是ヲ元正天皇トイフ、亦已ムコトヲ得ザルナリ〇元正天皇ノ皇位ヲ繼承セシ情實ハ、元明天皇紀元正天皇紀及ビ水鏡等ニ見エタリ就テ見ルベシ

阿倍内親王ハ聖武天皇ノ皇女ニシテ皇子基王ノ姊ナリ、聖武天皇皇位ヲ皇子ニ傳ヘント欲シ、立テ、皇太子ト為ス皇太子薨ズ、聖武天皇因テ已ムコトヲ得ズ、阿倍内親王ヲ立テ、皇太子ト為ス、遂ニコレニ皇位ヲ讓ル、阿倍内親王立ツ是ヲ孝謙天皇トイフ、孝謙天皇立ツニ及テ、天皇道祖(フナドノ)王〇天武天皇ノ孫ニシテ新田部親王ノ子ナリヲ立テ皇太子ト為ス〇孝謙天皇ハ子無キコト必セルヲ以テ聖武天皇命ジテ道祖王ヲ立テ皇太子タラシメシナリ父聖武天皇ノ意ニ從フナリ、聖武天皇ノ皇子無キヲ以テ、皇位ヲ皇女ニ傳フト雖ヘトモ、而レドモ其ノ恒典ニ非ラザルヲ以テ、乃(チ)道祖王ヲ以テ立テ、其ノ皇太子ト為シ、時ノ至ルヲ竢テ之ニ皇位ヲ繼承セシム以テ推古天皇以来ノ女主ノ跡ニ傚フナリ〇女主ノ跡ニ傚フトハ道祖王ヲ以テ皇太子ト為シテ、孝謙天皇ヲシテ時ノ至ルヲ竢テ皇位ヲ傳ヘシメント欲スルナリ聖武天皇崩ズ、孝謙天皇皇太子道祖王ノ意ニ適セザルヲ以テ之ヲ廢シ、代フルニ大炊(オホヒノ)王ヲ以テシ、遂ニ之ニ皇位ヲ讓ル、是ヲ淳仁天皇トイフ、而シテ後淳仁天皇モ亦孝謙天皇ノ意ニ適セズ之ヲ廢ス、因テ再祚ス、所謂ル稱德天皇是ナリ、天皇ノ再祚スルヤ時ニ代リ立ツベキ者無シ、亦已ムコトヲ得ザルナリ〇孝謙天皇初メ皇太子道

（祖王ヲ廢シ、後淳仁天皇ヲ廢ス、諸王尚アリトイヘドモ、立テ皇太子ト為スベキコト是ニ至テ甚ダ難シ、其ノ情實推考シテ畧知ラル、孝謙天皇ノ再祚スルヤ實ニ已ムコトヲ得ザルナリ）

興子オキコ内親王ハ後水尾天皇ノ皇女ニシテ、高仁親王及某皇子、後光明天皇、後西院天皇、靈元天皇ノ姉ナリ、後水尾天皇皇位ヲ高仁親王ニ傳ヘント欲ス、高仁親王薨ズ、而シテ皇子某生ル亦薨ズ、天皇因テ皇位ヲ興子内親王ニ讓ル、興子内親王立ツ、是ヲ明正天皇トイフ、後水尾天皇ノ皇位ヲ辭セシコトハ、衰老ニ依ルニ非ラズ萬機ニ堪ヘザルナリ（〇事ハ八巻ニ委シ）後水尾天皇讓位ノ後、後光明天皇、後西院天皇、靈元天皇ヲ生ム、後水尾天皇ノ皇位ヲ讓リシハ、後光明天皇以下三天皇ヲ生マザリシ前ニシテ、實ニ已ムコトヲ得ザリシナリ（〇高仁親王ハ寛永三年十一月十三日生ル、同月廿五日親王宣下アリテ儲君ト為ル、同五年六月十一日薨ズ、年三歳ナリ、某皇子ハ寛永五年九月廿八日生ル、若宮ト称ス、同年十月六日薨ズ、其ノ後顯子内親王生ル男ニ非ラズ、天皇因テ意ヲ決シテ皇位ヲ興子内親王ニ讓ル已ムコトヲ得ザリシコト以テ見ルベキナリ）

智子トシコ内親王ハ櫻町天皇ノ皇女ニシテ、桃園天皇ノ姉ナリ、桃園天皇崩ズ、皇子英仁親王（後桃園天皇）アリ年未ダ長ゼズ、群臣相議シテ智子内親王ヲ奉戴シ以テ勸進ス、内親王因テ皇位ヲ繼承シ、以テ英仁親王ノ長ズルヲ竢ツ、是ヲ後櫻町天皇トイフ、亦已ムコトヲ得ザリシナリ（〇桃園天皇崩ズ皇子英仁親王時ニ年五歳ナリ、萬機ヲ決スルコト能ハズ、故ヲ以テ後櫻町天皇立ツ、已ムコトヲ得ザルノ情實以テ見ルベキナリ）本邦ニ於テ女主ノ皇位ヲ繼承セシ者、推古天皇ヨリ後櫻町天皇ニ至テ總ベテ八主ナリ、其ノ皇位ヲ繼承スルヤ皆已ムコトヲ得ザルニ出ヅルナリ

日本政府圖書

皇位繼承篇巻十終

国立公文書館
National Archives of Japan